

第2部

この10年の記録

10年前に発刊された『闘魂 90年の軌跡』の「第2部 年代誌」に、東大ア式蹴球部の1918年から2008年までの公式戦の記録が網羅されている。この項では、その後を継いで、2009年から2018年までの公式戦記録を掲載する。

この10年の男子チームは、東京都リーグの1部と2部を行ったり来たりした10年であった。その中で、2011年に、東京都1部リーグで優勝し、関東リーグに望みをかけたが、関東大会で敗れ、35年ぶりの関東2部への復帰という夢は実現しなかった。

2018年シーズンは、東京都2部において13勝2敗3分の勝ち点42で優勝し、1部復帰を果たし、ア式100年の記念すべき年に花を添えることになった。

また、2014年に女子部が創部され、関東大学女子3部サッカーリーグに参戦し、本年で5年を迎える。創部の苦難を乗り越え、本格的なチーム作りの段階にある。これからの活躍が楽しみである。
(井田)



—— 90 年誌の空白を埋める ——

戦時下(1943 年度)の関東大学サッカーリーグの記録

浅見俊雄

『東京大学のサッカー 闘魂 90 年の軌跡』(東大ア式蹴球部 90 年記念誌、2008 年 12 月刊)の「第 2 部 年代誌」の、1943 年度(昭和 18 年度)には(120 ページ)、「戦争中断中の幻の優勝記録」として、昭和 19 年 9 月卒業(戦時中による短縮での卒業)の大貫雅敏が自宅に所持していた手書きの東大対一部 5 校との試合記録を、この年のリーグ戦の記録として掲載してある(表 2-1)。

対戦相手には前年のリーグ戦で最下位の商大はなく、代わりに前年度 2 部優勝の文理大が入っており、しかも前年度優勝の東大の対戦相手は文理大に始まって以下前年の下位から順に対戦していることから(早大、明大は逆になっているが)、リーグ戦がこの年も行われたことは事実として認められるだろう。ということで、東大だけの対戦記録ではあるが、この年の記録としてこれを上記の記念誌に掲載した。

そして 121 ページには「1944 年度(昭和 19 年度) 1945 年度(昭和 20 年度) 戦争のため活動中止(記録なし)」とページの上部に記して、以下は白紙のページとした(図 1)。

と同時に、東大は 1943 年度は全勝しているから優勝は間違いないこと、またこの年の順位が戦後の再開された 1946 年のリーグ戦の 1 部と 2 部の入れ替えに使われていなければ、1、2 部の所属チームに矛盾が生じることを指摘していた。

当時戦争の激化、日本の劣勢の戦況下で、学徒も戦争に動員されるようになり、1943(昭和 18)年 3 月に文部省で「戦時下学徒体育訓練要綱」が制定され、中学校スポーツの全国大会、大学スポーツのリーグ戦の開催が禁止されたのであった。上記のリーグ戦はその発布後に要綱に反して行われたものなので、新聞等にも記録が掲載されず、公けには記録は残されていなかったのであろう。

その後、東京教育大学サッカー部編『東京教育大学サッカー部史』(恒文社刊 1974 年)の 225 ページに、1943 年度のリーグ戦一部の記録が掲載

されていることが分かった。それが表 2-2 の「関東大学リーグ一部成績」である。これによって表 1 の 1942 年、表 2-1 の 1943 年のリーグ戦の記録、そして 44、45 年の戦争によるリーグ戦の中断を経て、の 1946 年の記録への継続性が、1、2 部の入れ替えチームにその前年の成績が反映されていることから、矛盾のないことが証明されることになる。それは表 1 から表 2-2 へ最下位の商大が 2 部に落ちて文大が 1 部に昇格し、表 2-2 から表 3 へは最下位の明大が落ちて商大が 1 部へ昇格していることからである。

いずれにせよ、戦時下の締め付けの厳しい中、禁止令に反してまでリーグ戦を敢行した先輩たちのサッカーへの情熱に敬意を表するためにも、関東大学リーグを所管している関東サッカー協会及び関東学連が、この幻の記録を幻としてなかったものと扱うのではなく、事実として公認していただきたいと強く念願するものである。

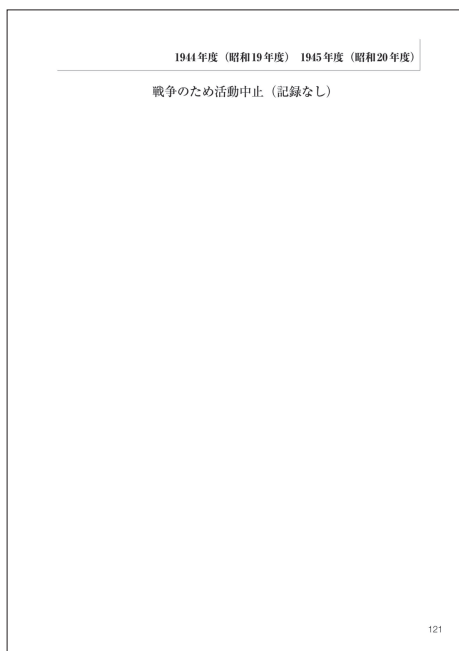


図 1 『闘魂90年の軌跡』121ページ

関東大学リーグ1部成績

表1 1942年度(昭和17年度)19回

	東大	早大	明大	慶大	立大	商大	勝	負	分	得	失	差	点
東大		○1-0	●2-4	△1-1	○4-0	○5-0	3	1	1	13	5	8	7
早大	●0-1		○5-1	○5-1	○8-1	●2-4	3	2	0	20	8	12	6
明大	○4-2	●1-5		○1-0	●2-4	○4-1	3	2	0	12	12	0	6
慶大	△1-1	●1-5	●0-1		○3-2	○5-0	2	2	1	10	9	1	5
立大	●0-4	●1-8	○4-2	●2-3		△1-1	1	3	1	8	18	-10	3
商大	●0-5	○4-2	●1-4	●0-5	△1-1		1	3	1	6	17	-11	3

『闘魂90年の軌跡』より

表2-1 1943年度(昭和18年度)

◇リーグ戦

東大 7-1 文理大

東大 7-0 立大

東大 5-3 慶大

東大 11-2 早大

東大 5-0 明大

〔GK〕近藤 〔FB〕大貫、木村

〔HB〕奥瀬、須賀、渡辺

〔FW〕中村、加藤、伊藤、奥島、三上

『闘魂90年の軌跡』より

表2-2 関東大学リーグ一部成績

	帝大	早大	慶大	文大	立大	明大	勝点
帝大		2	2	2	2	2	10
早大	0		2	2	2	2	8
慶大	0	0		1	2	2	5
文大	0	0	1		1	2	4
立大	0	0	0	1		2	3
明大	0	0	0	0	0		0

東京大学サッカー部編『東京教育大学サッカー部史』
(1974年)より

表3 1946年度(昭和21年度)20回

	早大	東大	文理大	慶大	商大	立大	勝	負	分	得	失	差	点
早大		○3-0	○3-1	△1-1	○3-1	○7-0	4	0	1	17	3	14	9
東大	●0-3		○6-0	○2-0	○7-0	○11-0	4	1	0	26	3	23	8
文理大	●1-3	●0-6		○2-1	○2-1	—							
慶大	△1-1	●0-2	●1-2		○5-0	○8-0	2	2	1	7	8	-1	5
商大	●1-3	●0-7	●1-2	●0-5		○2-0	1	4	0	4	17	-13	2
立大	●0-7	●0-11	—	●0-8	●0-2								

『闘魂90年の軌跡』より

谷間の世代 昇格への道

2009年度卒は谷間の世代だった。3年次の都リーグでは全9試合のうち2試合で一人もスタメンに入らず、他の7試合も南田（筑駒）か村上（土浦第一）のどちらかのみ。他にピッチに立ったのは第5節に途中出場した高木（筑附）だけだった。しかしそんな面々が最高学年となった09年度に、ア式はリーグ2位の成績で9年ぶりの1部自動昇格を果たした。その要因は何よりも、後に東大初のJリーガーとなる久木田（熊本）を筆頭に3年以下が精鋭ぞろいだったことにあるだろう。だが一方で、谷間の09年度卒の存在意義もそれなりにあったことをこの機会に振り返らせていただきたい。

首脳陣の決断と献身

09年度は主将の吉田（弘学館）、副将の深田（日比谷）、村上ら首脳陣によるひとつの決断から始まった。過去6シーズンにわたり指揮を執った鈴木久雄氏から、鈴木宏尚氏へのコーチ交替である。新コーチが打ち出したのは常に「相手の逆を取る」という、それまでとは大きく異なるサッカーだった。練習内容も根本から変える新方針は当初こそチームの中に戸惑いを生んだが、基本技術と走力の向上を徹底した前コーチの指導が土台となって急速に浸透。学業と練習の合間を縫って獲得交渉に奔走した吉田らの献身は予想を超えて実を結んでいった。

“降りない”Bチーム

トップチーム以外の部員がどう部にコミットするのか——どの代も直面してきた課題だろう。09年度は、Bチームがプレイヤーとしての成長を諦めなかったことが、部全体の熱量を高め続けていた。そして、そのムードを牽引していたのが09年度卒のメンバーである。夏合宿で紅白戦に入りスタメンとしてのぎを削った望月（アルカディア）、入部前のブランクを乗り越えて練習に食らいついた熱海（筑駒）、



全部員の中で最もジムに通い筋トレに打ち込んだ岩田（洛南）らがチームにもたらした影響は、記録には残らずとも決して小さくないものだった。そして、Bチームが活気を持ちつつも規律を失わなかったのは副将の深田の存在による。深田は2年次にリーグ戦デビューを果たしたものの、以後はヘルニアに悩まされ、リハビリ班とBチームの往復を強いられた。しかし、副将として部を統括しつつ、Bチームを現場で引っ張る立場になったことで、組織全体を横断的に押し上げる重要な役割を担った。

計算できる戦力へ

秋のリーグ戦が開幕すると、09年度卒はピッチ内でも前年までとは異なる立ち位置を占めるようになる。冷静な戦術眼を持つMF吉田、フィードが光るGK藤安（横浜緑ヶ丘）、運動量で群を抜くSB南田・村上らは、守備の骨格をなす戦力に成長。長身とキック力を生かしてFWからCBに転向した高木と、MFからFWに移った後藤（長岡）のコンバート組は主に途中出場で構想に加わった。ハイライトは第8節。4勝1敗2分けで上位に踏みとどまっていたア式は、昇格を争う明治学院大学との直接対決に臨んだ。藤安・村上・吉田が名前を連ねたスタメンは、久木田と12年度卒三浦（栄光学園）の2トップにボールを集めながら地力で勝る明学の攻撃を必死に凌ぎ続ける。後半15分には村上が負傷するも、代わりに入った南田が守備の強度を保ち続けた。そして後半28分、三浦と代わった後藤が先制点をマーク。その後は11人全員で守り抜き、格上相手に金星を挙げるとともに自動昇格を決定づけた。

谷間の矜持

年次やうまさにかかわらず全員が成長できる場を作り、ピッチ内ではアシストやバックアップを地道にこなす——09年度卒が果たした役割はそんなふうには総括できるかもしれない。しかしそれは特別なことというよりも、先輩方が背中ですべて示してくれていたことを自分たちなりに実践した結果にすぎない。

とは言いつつも最後に、現在まで続くア式の伝統がふたつ、09年度卒の人間から始まっていることに触れておきたい。ひとつめは、ベンチ外全員でチャントを歌う応援スタイル。これは望月の提案・主導によって生まれたものだ。ふたつめは半田（土浦第一）が先駆けとなった女子部員のアシスタントトレーナー。この役職は小林、櫻井、迹目（日本女子大）の3人が補助業務に徹してくれたからこそあり得たものでもあった。

2009年度卒は谷間の世代だった。だが、割と悪くない谷間だったのではないかと思う。（後藤遷也）

公式試合記録

◆東京都サッカートーナメント兼総理大臣杯関東予選

1回戦 8-1○ 首都大（4/5）

2回戦 1-4● 玉川大（4/12）

◆春季対抗戦（5/3～31）

予選リーグ第1節 1-1 △ 日大

予選リーグ第2節 4-2 ○ 武蔵大

予選リーグ第3節 5-1 ○ 成城大

予選リーグ第4節 2-3 ● 東京経済大

決勝トーナメント1回戦 1-5 ● 明治学院（6/21）

・部長 影本 浩

・総監督 荻内俊和

・監督 胡内健一

・コーチ 鈴木宏尚

・学生コーチ 千布勇気他

・主将 吉田航太郎

・副将 村上達也、深田啓介

・主務 南田遼太

・練習 御殿下、農学部

・部室 農学部

◆京都大学定期戦（8/2、御殿下）

1軍戦 2-0、2軍戦 2-1、3軍戦 1-5

◆東京都大学リーグ2部： 6勝1敗2分 2位で1部昇格

（8/30～10/25、御殿下他）

第1節 2-2 △ 桜美林

第2節 2-1 ○ 山梨大

第3節 2-3 ● 首都大

第4節 5-0 ○ 東京外語大

第5節 4-1 ○ 日大生資

第6節 0-0 △ 帝京大

第7節 6-2 ○ 成城大

第8節 1-0 ○ 明治学院

第9節 5-1 ○ 上智大



2009年度東京都大学リーグ2部成績

チーム	帝京	東大	明学	成城	上智	首都大	山梨大	桜美林	日大生資	東外大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
帝京大学	—	0△0	1△1	2○0	2○1	4○0	0△0	2○0	5○0	3○1	21	6	0	3	19	3	16
東京大学	0△0	—	1○0	6○2	5○1	2●3	2○1	2△2	4○1	5○0	20	6	1	2	27	10	17
明治学院大学	1△1	0●1	—	1△1	4○1	1●3	3◎0	3○0	0△0	2○1	15	4	2	3	15	8	7
成城大学	0●2	2●6	1△1	—	1△1	5○0	2△2	3○1	1○0	5○1	15	4	2	3	20	14	6
上智大学	1●2	1●5	1●4	1△1	—	2○0	5○0	3○2	1△1	4○2	14	4	3	2	19	17	2
首都大学東京	0●4	3○2	3○1	0●5	0●2	—	1○0	0●3	2△2	5○1	13	4	4	1	14	20	-6
山梨大学	0△0	1●2	0●3	2△2	0●5	0●1	—	4○1	2○0	3○0	11	3	4	2	12	14	-2
桜美林大学	0●2	2△2	0●3	1●3	2●3	3○0	1●4	—	3△3	2○1	8	2	5	2	14	21	-7
日大生物資源	0●5	1●4	0△0	0●1	1△1	2△2	0●2	3△3	—	4○1	7	1	4	4	11	19	-8
東京外大	1●3	0●5	1●2	1●5	2●4	1●5	0●3	1●2	1●4	—	0	0	9	0	8	33	-25

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW		交代出場選手				
桜美林	藤安	大内	白井	高木	道喜	森元	吉田	宮川	久保	久木田	三浦	南田				
山梨	藤安	大内	白井	高木	道喜	森元	吉田	宮川	久保	久木田	三浦	南田	後藤			
首都大	藤安	大内	白井	高木	道喜	森元	吉田	南田	久保	久木田	三浦	江連	松谷	佐藤	村上	古賀
東外大	藤安	大内	白井	佐藤	村上	森元	吉田	久保	道喜	久木田	三浦	松谷	古賀	南田	後藤	
日大生資	藤安	大内	白井	佐藤	村上	森元	道喜	南田	古賀	久木田	後藤	高木	加賀田	三浦	野中	
帝京大	藤安	大内	佐藤	村上	高木	森元	吉田	道喜	宮川	久木田	古賀					
成城大	藤安	大内	白井	佐藤	村上	森元	吉田	宮川	道喜	後藤	久木田	古賀	高木	松谷	加賀田	南田
明学大	藤安	大内	白井	佐藤	村上	森元	吉田	宮川	道喜	久木田	三浦	南田	松谷	高木	加賀田	久保
上智大	藤安	大内	白井	佐藤	村上	森元	吉田	宮川	道喜	久木田	三浦	高木	南田	松谷	加賀田	久保

タカマリズム

2009年に東京都リーグ1部に昇格。2010年はその昇格にピッチ上で貢献したメンバーも多数残っていたので、一気に関東リーグ昇格を目指そうという気運が高まった。そして前年と同じく鈴木宏尚コーチの元、タカマリズム*が浸透したア式蹴球部は日々激しい練習に取り組んだ。

※タカマリズム…鈴木コーチの口癖「高まろう」から生まれた言葉。選手として人として貪欲に成長していこうという動きのこと。ちなみに次に多い口癖は「タマシイ！」

GKがいない

まず初めにGK不足という問題にぶち当たるが、前年に4年生としてゴールマウスを守ってくれた藤安先輩が男気を見せもう1年ア式のゴールマウスを守ってくれることになった。またもう一人、以前はFWだった新4年生田島の、退部していたもののGKとして戻ってくるというミラクルプレーによりなんとか問題は解消する。

しかし、充実した陣容で挑んだ総理大臣杯予選トーナメントも春季対抗戦もそれぞれ初戦敗退と予選リーグ敗退という結果に終わる。（春季対抗戦は都リーグの昇格降格に無関係）しかも春季対抗戦の予選リーグ最終節で主将久木田が苛立ちか焦りからか必要のないGKへのチャージで2枚目のイエローカードで退場。秋季リーグ第1節出場停止というおまけ付きである。このようにシーズンスターから春までは公式戦で結果が出ない状況が続いた。

ありがとう京大

結果が出ない中でも部内にはびこるタカマリズムにより練習の質と量は充実しており、練習試合も手応えを感じていたのでは公式戦でいかに勝つかというところで、8月に第61回京都大学定期戦が京都大学のグラウンドで行われた。3軍戦、2軍戦をそれぞれ勝利、引き分けで終え、1軍戦も3対2で競り勝ち、ここでやっと春から公式戦で続いていた悪い流れを断ち切り、秋季リーグへのよいはずみとなった。ありがとう京大。

また、例年試合後に行われる京大サッカー部との交流会も京大側のセッティングで盛り上がり、それがきっかけで数年後京大部員とア式マネージャーがめでたくゴールインするというミラクルも起こった。やるな京大。

関東大会まであと一歩

2010年は秋季リーグで東京都リーグ1部の3位以上が関東大会に進むことができ、そこで他県リーグ代表とトーナメント戦を行い関東昇格を決めるという流れだったので、とにかく3位以内を目標に万全の準備をして臨んだ。迎えた秋季リーグ第1節は前年関東リーグに所属していた成蹊大学に4対0で快勝。この流れで一気に勝ち点を積み上げたかったが、続く第2、3、4節で1分2敗という成績で一気に関東昇格が遠のいてしまう。それでも背水の陣で臨んだ次の第5節東京経済大学との試合に5対4という殴り合いスコアで勝って波に乗り、最終節を残して4位という位置につける。

迎えた最終節は、なんと3位帝京大学との直接対決。帝京大学とは勝ち点差3、得失点差7という状況であり3位以内になるには帝京大学に4点差以上で勝たなければならなかった。不可能な点差ではない、そう信じて90分間戦い続けた。しかし結果は2対1の勝利。最終節を強豪相手に勝利したのに全く喜べないという結果になってしまった。

関東大会へはあと一歩で進めなかったが、強豪相手に互角の戦いをできたことでア式の部員全員が現実的に関東昇格を意識できたことはその後のア式蹴球部にとっても大きかったのではないだろうか。また私の代のメンバーは人数は少ないながらも、公式戦でのベンチ外選手による応援や新入生の勧誘強化を下級生の頃から発案、主導し、ピッチ外でもア式蹴球部を強くし、価値を高めることに貢献してきた。こういった活動がア式蹴球部全体のレベルアップにつながったことは間違いない。

最後に個人的な話だが私はこの2010年、東大初のプロサッカー選手になるという目標を達成することができた。一緒に真剣にサッカーに取り組んだ仲間や協力してくださった先輩方には心から感謝している。（久木田 紳吾）



公式試合記録

◆東京都サッカートーナメント兼総理大臣杯関東予選
1回戦 0-1 ● 武蔵大（4/8、延長で負け）

◆春季対抗戦（5/5～23）

予選リーグ第1節 2-3 ● 武蔵大
予選リーグ第2節 2-1 ○ 玉川学園大
予選リーグ第3節 3-0 ○ 立教（不戦勝）
予選リーグ第4節 0-1 ● 大東文化大

◆京都大学定期戦（8/2、京大農学部）

1軍戦 3-2、2軍戦 1-1、3軍戦 1-0

・部長 影本 浩
・総監督 荻内俊和
・監督 胡内健一
・コーチ 鈴木宏尚
・主将 久木田紳吾
・副将 大内三千生、松谷康平
・主務 白井英介
・練習 御殿下、農学部
・部室 農学部

◆東京都大学リーグ1部 5勝3敗1分 4位

（8/29～10/24、御殿下他）

第1節 4-0 ○ 成蹊大
第2節 3-3 △ 立正大
第3節 0-4 ● 日大
第4節 3-4 ● 立教大
第5節 5-4 ○ 東京経済大
第6節 1-2 ● 亜細亜大
第7節 2-0 ○ 玉川大
第8節 2-0 ○ 学習院
第9節 2-1 ○ 帝京大

2010年度東京都大学リーグ2部成績

チーム	日大	立正	帝京	東大	立教	亜細亜	東経	玉川	成蹊	学習院	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
日本大学	—			4○0							23	7	0	2	27	7	20
立正大学		—		3△3							19	5	0	4	17	8	9
帝京大学			—	1●2							16	5	3	1	18	9	9
東京大学	0●4	3△3	2○1	—	3●4	1●2	5○4	2○0	4○0	2○0	16	5	3	1	22	18	4
立教大学				4○3	—						13	4	4	1	21	15	6
亜細亜大学				2○1		—					12	3	3	3	16	11	5
東京経済大学				4●5			—				9	2	4	3	13	22	-9
玉川大学				0●2				—			8	2	5	2	10	20	-10
成蹊大学				0●4					—		7	2	6	1	8	29	-21
学習院大学				0●2						—	2	0	7	2	3	16	-13

リーグ出場選手

	GK	DF					MF				FW		交代出場選手				
成蹊大	藤安	大内	白井	佐藤	石井	森元	道喜	宮川	古賀	久保	三浦	川瀬	江連	有山	賀茂	浅井	
立正大	藤安	大内	白井	佐藤	古賀	森元	道喜	宮川	久保	久木田	三浦	賀茂	長尾	江連			
日大	藤安	大内	白井	佐藤	古賀	森元	道喜	宮川	久保	久木田	三浦	松谷	浅井				
立教大	藤安	大内	白井	佐藤	古賀	森元	道喜	宮川	久保	久木田	三浦	松谷	賀茂	浅井	長尾		
東経大	藤安	大内	白井	浅井	古賀	森元	道喜	松谷	久保	久木田	三浦	宮川	佐藤	長尾	石井	賀茂	
亜細亜大	藤安	大内	白井	浅井	古賀	森元	道喜	宮川	久保	久木田	三浦	松谷	佐藤				
玉川大	藤安	大内	白井	浅井	古賀	森元	道喜	松谷	久保	久木田	三浦	東野					
学習院大	藤安	大内	白井	浅井	古賀	森元	道喜	宮川	久保	久木田	三浦	松谷	石井				
帝京大	藤安	大内	白井	浅井	古賀	森元	道喜	宮川	久保	久木田	三浦	松谷					

都1部優勝、関東大会へ

2009年に東京都リーグ1部への昇格を遂げ、翌年久木田主将のもと関東リーグ昇格を掲げて挑んだ秋季リーグは4位という結果に終わった。最終節終了後に試合に出場していた2、3年生の部員たちが抱いた感触は、来年は関東リーグに昇格できるかもしれない、という漠然としたものだった。この感触を確信に変えるためにはさらなる改革が必要であった。そこで、チームの技術的な面を改善するために、新たなコーチとして林健太郎氏を招聘した。それまでア式の伝統的なスタイルであった4-4-2から、当時の流行スタイルの4-1-2-3へと変更を行い、グアルディオラ流のパスサッカーを目指した。

東日本大震災

ちょうど春の検見川合宿の午後の練習中のことであった。今までに経験したことのない強い揺れを感じた。すぐさま練習を中止し、宿舎のテレビをつけてみると、三陸沿岸を襲う凄惨な津波が映しだされていた。福島原発事故について報道がなされたのは少し後のことだった。数週間にわたり全学で部活動が停止となり、御殿下グラウンドもヘリポートとして利用された。京大のサッカー部やかつて所属していた高校の部活で個人練習を行った部員も少なかった。二週間ほど経ってようやく活動を再開できたものの、学外のグラウンドを借りることを余儀なくされた。事態が落ち着いてからも練習は朝6時の御殿下で行われた。当初は技術的な試行錯誤が多かった新体制において、震災はあらためてサッカーをできることのありがたさを感じさせるものだった。

スタイルの確立（大臣杯、春季リーグ、京大戦）

チームの出帆にはさらなる困難が待ち構えていた。関東リーグの強豪との練習試合で一定の手応えを感じていたものの、厳しいプレスに対してひるむことなくボールを動かすというまでには至らなかった。大臣杯では3回戦で立教大学に接戦の末敗れ、春季リーグでも格下相手に敗れるなど厳しい状況が続いた。チームのスタイルがようやく確立されたのは7月末の京大戦の頃であった。3-0という結果以上に、中盤を三人で制圧し、サイドバックを含め両翼を広く使い、前線の空いたスペースに様々な選手が流動的に入り込むという理想を体現できたことが大きな自信となった。

波乱の秋季リーグ

結果的には1部優勝というここ数年で最高の結果

を収めることになるわけだが、秋季リーグでの道程は平坦なものではなかった。意気揚々と臨んだ初戦の亜細亜大との試合では、相手のフィジカルに圧倒され完膚なきまでに敗れた。次節でも格下とみなされる東京経済大に引き分け、部内に暗雲が立ちこめていた。しかし、優勝候補の山梨学院大に快勝したことで転機は訪れる。多くの選手が守備への意識を高め、ア式最大の長所が（林コーチいわく）「切り替えの早さ」であることを再認識した。玉川大、立正大、立教大に対して三連勝を収めたことでチームの勢いは最高潮に達する。上位6チームに優勝の可能性が残る混戦の中むかえた帝京大との最終節、東大は1年生添田の劇的な決勝ゴールによって関東大会出場を決めた。他会場の結果を確認し、優勝したということを知ったのは試合が終わってからしばらく経ってからのことだった。それほどまでに選手は順位のことを気にしていなかった。ただひとつひとつのプレーに集中し、楽しんでいた。

栄光から挫折へ（関東大会）

慣れないボール、慣れない他県の対戦相手、慣れない群馬の会場、すべてが関東大会を経験したことのない選手たちに重くのしかかった。初戦の平成国際大との一戦では独特のテクニックに翻弄され完敗を喫する。背水の陣で臨んだ産業能率大との一戦では、先制したものの、相手の高さを活かした戦術に徐々に押しこまれ2-3で敗れる。これにて関東リーグ昇格への望みは弊えた。何ともふがいない二試合であった。もし都リーグでの結果が優勝ではなく2位だったら、その悔しさをばねに関東リーグに昇格できていたのでは、と今でもふと思わずにはいられない。だが、関東大会で経験を積んだ選手たちが翌年にパスサッカーのスタイルを完成させ、（むろん諸刃の剣とはいえ）近年稀に見る美しいサッカーを展開することになるのもまた事実である。

（森元規裕）



公式試合記録

◆東京都サッカートーナメント兼総理大臣杯関東予選

2回戦 2-1 ○ 大東文化大

3回戦 0-1 ● 立教大 (5/3)

第3節 1-0 ○ 亜細亜大

◆春季対抗戦 (6/5 ~ 7/3)

予選リーグ第1節 0-1 ● 日大商学部

予選リーグ第2節 3-2 ○ 亜細亜大

予選リーグ第3節 1-2 ● 帝京大

予選リーグ第4節 5-2 ○ 成蹊大

・部長 影本 浩

・総監督 荻内俊和

・監督 胡内健一

・コーチ 林健太郎

・フィジカルコーチ 平井慎二郎、二瓶伊浩、菊池竜太

・学生コーチ 吉田航太郎他

・主将 森元規裕

・副将 道喜開視、三浦良介、古賀久喜

・主務 宮川啓輝、石川蘭

・学連 野中尚輝

・練習 御殿下、農学部

・部室 農学部

◆京都大学定期戦 (7/31、御殿下)

1軍戦 3-0、2軍戦 4-1、3軍戦 2-1

◆東京都大学リーグ1部 5勝2敗2分 優勝

(8/28 ~ 10/23、御殿下他)

第1節 0-3 ● 亜細亜大

第2節 1-1 △ 東京経済大

第3節 3-1 ○ 山梨学院大

第4節 3-3 △ 明治学院大

第5節 1-0 ○ 玉川大

第6節 3-2 ○ 立正大

第7節 2-1 ○ 立教大

第8節 0-1 ● 東京農業大

第9節 2-1 ○ 帝京大

◆関東リーグ昇格決定戦 敗退

第1節 0-2 ● 平成国際大

第2節 2-3 ● 産業能率大

2011年度東京都大学リーグ1部成績

チーム	東大	山梨学院	亜細亜	東農大	明治学院	立教大	玉川大	立正大	帝京大	東経大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
東京大学	—	3○1	0●3	0●1	3△3	2○1	1○0	3○2	2○1	1△1	17	5	2	2	15	13	2
山梨学院大	1●3	—	0●3	1●2	3△3	4○2	4○2	4○2	3○0	6○0	16	5	3	1	26	17	9
亜細亜大	3○0	3○0	—	1●2	2●4	0△0	0●2	2○1	2○1	1○0	16	5	3	1	14	10	4
東京農業大学	1○0	2○1	2○1	—	0●1	0△0	0●1	2○1	1●3	5○3	16	5	3	1	13	11	2
明治学院大	3△3	3△3	4○2	1○0	—	1●3	0△0	1●2	1○0	3○1	15	4	2	3	17	14	3
立教大学	1●2	2●4	0△0	0△0	3○1	—	1○0	2○1	1●2	3○0	14	4	3	2	13	10	3
玉川大学	0●1	2●4	2○0	1○0	0△0	0●1	—	2●7	1△1	2○1	11	3	4	2	10	15	-5
立正大学	2●3	2●4	1●2	1●2	2○1	1●2	7○2	—	1○0	1△1	10	3	5	1	18	17	1
帝京大学	1●2	0●3	1●2	3○1	0●1	2○1	1△1	0●1	—	2△2	8	2	5	2	10	14	-4
東京経済大学	1△1	0●6	0●1	3●5	1●3	0●3	1●2	1△1	2△2	—	3	0	6	3	9	24	-15

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW		交代出場選手			
亜細亜大	今泉	片山	浅井	田中	長尾	森元	道喜	宮川	東野	久保	三浦	添田	石井	賀茂	富田
東経大	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	久保	賀茂	添田	古賀	富田	
山梨学院	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	久保	賀茂	添田	古賀	富田	東野
明治学院	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	久保	賀茂	添田	三浦	古賀	東野
玉川大	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	久保	賀茂	三浦	添田	古賀	秋穂
立正大	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	賀茂	三浦	古賀	添田	羽場	秋穂
立教大	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	賀茂	三浦	添田	古賀	羽場	森野 久保
東農大	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	賀茂	三浦	久保	添田	古賀	富田
帝京大	今泉	長尾	浅井	田中	石井	森元	道喜	宮川	片山	久保	三浦	古賀	賀茂	添田	東野 有山

我らが青春

東京大学運動会ア式蹴球部創設100周年、誠にありがとうございます。私が所属したのは100年のうちのたった4年間ではありますが、先輩・同期・後輩と喜怒哀楽を共にした、人生で最も濃密な時間でした。100年の歴史の一端を担った者として、拙筆ではありますが、私が主将を務めたH24シーズンを振り返らせて頂きます。

関東昇格への階段

H21年に8年ぶりの東京都1部昇格、H22には後のJリーガー久木田主将を擁して1部初年度ながら4位、そしてH23には東京都1部リーグで優勝し関東参入戦へ進出と、確実に「関東昇格」への階段を登っている中で、私は主将のバトンを受け継ぎました。背負うものの重さに不安もありましたが、目指すは当然「関東昇格」。前年度までの戦いを経て挑む壁の高さを知り、越えられない壁ではないと感じていたのも、高いモチベーションを持って新体制のスタートを切りました。前年度に抜群の破壊力を誇った攻撃陣はほとんど引退してしまった一方、戦術面では就任2年目を迎えた林コーチの哲学が浸透してきたこともあり、春先からチーム内の連携は比較的良好な状態でした。副将の浅井、田中を中心に組織化された守備を強みとして、練習試合でも結果を出していました。総理大臣杯（現アミノバイタルカップ）でも都予選を勝ち抜き、目標としていた都県代表決定戦に進出しました。しかし、その代表決定戦では、千葉県のみ海大学に個の力で圧倒され敗退。前年度から継続してきたことの結実を実感しつつも、課題が露見した春でした。

秋季リーグへ向けて

H24シーズンは現行の18試合制に移行する前の最後のシーズンで、秋の9試合のみで戦うレギュレーションでした。短期決戦だけに1試合の重みが大きく、シーズンへの入り方は大会の結果を左右します。例年、開幕戦の結果は芳しくないことが多かったため、小野フィジカルコーチを中心に、夏季合宿などで徹底してフィジカルの強化を図りました。また、関東リーグや都県上位チームとの練習試合も重ね、心身の充実を感じながら秋季リーグの開幕を迎えました。

秋季リーグ

開幕戦の相手は、我々が1、2年の時の恩師である鈴木宏尚氏がコーチを務める大東文化大学。総理大臣杯でも延長戦までもつれた難敵でしたが、三浦の

ゴールで1-0で勝利し、開幕戦を飾ることができました。続く成蹊戦は3-1の快勝、第3節の明治学院戦は後半に追いつかれるも1-1の引き分けと、3節を終えて2勝1分と、関東昇格へ向けて上々のスタートを切りました。

しかし、結果を先に言ってしまうと、残りの6試合を1勝3敗2分、最終成績は3勝3敗3分の7位という結果に終わりました。第4節の立正戦で、残り10分から逆転されたのを皮切りに、試合終盤に失点する展開を繰り返し4～7節を3敗1分。第8節の山学戦で勝利するも、関東大会の入替戦の切符を取る所まで挽回するだけの試合数は既に残されていませんでした。

足りなかったもの

敗戦はすべて1点差、失点はすべて80分以降。実際のところ、チーム力としてはほぼ互角と言って良かったと思います。しかし、それでも明確に何が足りないことを突き付けられる、そんな結果でした。10試合やれば5勝5敗になる相手に、1番大事な試合で負けてしまう、そんな未熟さがチームにあったのだと思います。どちらに転んでもおかしくない試合を拾う「勝ち運」、もしくは1点差でもなんでも勝ち切るという「勝者のメンタリティ」を、大学4年間でどのように身に付けたいのかはわかりません。そんなものに頼らない、圧倒的な力を身に付けることもまた、容易ではありません。しかし、先輩たちが100年積み上げてきた誇りは、勝つための大きな武器になるはずです。私もその中の1人として、微力ではありますが応援させていただきます。がんばれ！

（古賀久善）



公式試合記録

◆東京都サッカートーナメント兼総理大臣杯関東予選

2回戦 3-0 ○ 学習院（4/1）
 2回戦 2-0 ○ 日大商学（4/8）
 準々決勝 2-0 ○ 東経大（4/15）
 準決勝 0-1 ● 東農大（4/22）
 関東代表決定戦 1-3 ● 明海大（5/27）

◆春季対抗戦（1部,2部混成でリーグ戦を行った）

2勝7敗1分けで9位（2軍も出場した）

◆京都大学定期戦（7/29、京大農学部）

1軍戦 1-0、2軍戦 1-0、3軍戦 0-1

◆東京都大学リーグ1部 3勝3敗3分 7位残留

（8/26～10/21、御殿下他）

第1節 1-0 ○ 大東文化大
 第2節 3-1 ○ 成蹊大
 第3節 1-1 △ 明治学院
 第4節 1-2 ● 立正大
 第5節 0-0 △ 玉川大
 第6節 1-2 ● 東農大
 第7節 0-1 ● 立教大
 第8節 4-2 ○ 山梨学院
 第9節 1-1 △ 國學院

- ・部長 影本 浩
- ・総監督 荻内俊和
- ・監督 胡内健一、利重孝夫（代行）
- ・コーチ 林健太郎
- ・ドクター 福島一雅
- ・フィジカルコーチ 小野高志、二瓶伊浩、菊池竜太
- ・学生コーチ 緒方崇裕他
- ・主将 古賀久善
- ・副将 浅井淳平、田中敏生、長尾林太郎
- ・主務 川瀬智博
- ・練習 御殿下、農学部
- ・部室 農学部



2012年度東京都大学リーグ2部成績

チーム	明学	東農大	立教大	立正大	國學院	山梨学院	東大	成蹊大	大東文化	玉川大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
明治学院	—	1○0	2○1	0●1	2○1	4○2	1△1	2○1	3○1	0●1	19	6	2	1	15	9	6
東京農業大	0●1	—	1△1	0●1	1○0	2○1	2○1	2○1	3○2	2○0	19	6	2	1	13	8	5
立教大学	1●2	1△1	—	2○1	1●4	3○0	1○0	0●2	2○1	2○0	16	5	3	1	13	11	2
立正大学	1○0	1○0	1●2	—	3○1	2△2	2○1	2△2	2●3	2△2	15	4	2	3	16	13	3
國學院大学	1●2	0●1	4○1	1●3	—	0●1	1△1	2○1	3○0	3○2	13	4	4	1	15	12	3
山梨学院大学	2●4	1●2	0●3	2△2	1○0	—	2●4	4○2	1○0	3○2	13	4	4	1	16	19	-3
東京大学	1△1	1●2	0●1	1●2	1△1	4○2	—	3○1	1○0	0△0	12	3	3	3	12	10	2
成蹊大学	1●2	1●2	2○0	2△2	1●2	2●4	1●3	—	2●3	1○0	7	2	6	1	13	18	-5
大東文化大学	1●3	2●3	1●2	3○2	0●3	0●1	0●1	3○2	—	2△2	7	2	6	1	12	19	-7
玉川大学	1○0	0●2	0●2	2△2	2●3	2●3	0△0	0●1	2△2	—	6	1	5	3	9	15	-6

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW		交代出場選手				
大東文化	今泉	片山	浅井	田中	石井	添田	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	長尾	秋穂	吉清	羽場	川瀬
成蹊大	今泉	片山	浅井	田中	石井	添田	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	吉清	花嶋	秋穂	川瀬	羽場 榊原
明治学院	今泉	片山	浅井	田中	石井	添田	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	吉清	花嶋	榊原	羽場	秋穂
立正大	今泉	片山	浅井	田中	石井	添田	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	花嶋	榊原	羽場	川瀬	秋穂
玉川大	今泉	片山	浅井	田中	石井	添田	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	長尾	秋穂	羽場		
東農大	今泉	片山	浅井	田中	石井	添田	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	秋穂	榊原	中西	花嶋	川瀬
立教大	今泉	片山	浅井	田中	石井	添田	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	榊原	羽場			
山梨学院	今泉	秋穂	浅井	田中	石井	片山	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	花嶋	有山			
國學院	今泉	秋穂	浅井	田中	石井	片山	長尾	古賀	東野	賀茂	三浦	添田	吉清	羽場		

前後期制への挑戦

2013シーズンは、東京都リーグに関東リーグ同様の春開幕、ホーム＆アウェイの2回戦方式が導入された最初の年であった。どうピークを開幕に合わせそのまま走り抜けるか、その成否が結果を分ける印象であった秋季一発のリーグ戦から、より総合力の試される通期開催へ。その変化にどう対応するかが私達の代の大きなトピックであった。

昨シーズンを振り返ると、林コーチのもと鍛えた前線からの守備、切り替えの早さで相手に思い通りのサッカーをさせないことには成功したが、得点力不足、終盤での失点などによって勝ち点を積み上げることはできず、紙一重での東京都1部残留となった。そこで通期制への変更も鑑み、私達が目標として掲げたのは、守備だけではなくボール保持の面においても相手に優り、主導権を握る試合運びであった。「勝つべくして勝つ」。そんな姿を理想像として思い浮かべながら、林健太郎コーチとともにチーム作りを進めていった。

開幕戦は、アウェイ明治学院大戦。開幕への高揚感と、慣れない春開幕への不安感が入り混じる中キックオフの笛が鳴った。勢いよく試合に入ったかに見えたが、早々に思わぬ失点を喫してしまう。その後も、開幕前に取り組んでいたことを出せる場面もあったが、チャンスを決め切ることができず、そのまま0-1で敗戦。続く立正大、亜細亜大戦も力のあるチームにまづまづの試合をしながらも決定打はなく、自分たちの感覚としては“ポロツと”失点して三連敗。3節終わって関東昇格どころか降格候補の筆頭となってしまった。

三連敗の直後、日大との試合が中止となり気を取り直して臨んだ立教大戦には5-1で勝利を収めた。しかしその後は東経大に敗戦、残留争いのライバルである帝京大にも引き分けと結果は芳しくなかった。そんな状況を見かねてか、利重監督から林健太郎コーチに頼らずチームづくりをしてみよとの提案を受け、練習、試合ともにコーチ抜きで行うことに。

正直納得できない部分もあったが、結果として部員の奮起を促したところがあったかもしれない。

直後の國學院大戦、今でも思い出す、うだるような暑さの中、前半に挙げた一点を全員の気迫で守りきり勝利した。この勝利で全員が自信を取り戻したように感じた。

勢いそのままに山梨に乗り込んで臨んだ山梨学院大戦。優勝候補のチームに対し互角以上の戦いがで

き、引き分けて勝点1を獲得した。やや満足感に浸っていたが、観戦に駆けつけた林コーチから「良い試合だったけどもっとできるはず。引き分けて満足してはいけない」とのメッセージを受け取り、林コーチの現役への厳しくも温かい気持ちを感じるとともに次は必ず勝つ、という気持ちを新たにした。

そして前期最終節、延期されていた日大戦を迎えた。どれだけ攻め込まれても我慢して我慢して最後には必ず勝つ、そんな気持ちが皆にあった。関東リーグからの降格組で地力に勝る相手に対して、2-1の勝利。渾身の勝利であった。これだけの戦いが出来るのだから後期は巻き返せるはず、辛いシーズンの中で光明が差したように感じていた。

しかし、中断を経て迎えた後期リーグ開幕後、再び3連敗を喫してしまう。その後も特筆すべきような試合はなく、降格が決まっていた帝京大には勝利を収めたが、後期の勝利はこの1勝だけ。最終的に8位となり、関東入れ替え戦の結果残留を決めるといふなんとも寂しい結果となった。

振り返ってみると、2点を超える失点をした試合はなく、良い内容の試合もあった。しかし、それはすなわち去年と同じような負け方を繰り返したとも言え、勝利までの距離は自分たちの思っている以上に遠かったのかもしれない。

真面目に頑張ったから良いのか、一見真面目には見えないが勝負時に決定的な仕事ができる相手とは何が違うのか、それは才能だから努力で超えるしかないのか？優等生として生きてきた我々東大生がぶち当たった壁、それが東京都リーグでの戦いを通じて得た経験ではないかといま振り返って思う。我々OBはこの経験を次のフィールドでの宿題とし、ピッチ上で答えを出す役目は現役が果たしてくれることと期待している。

最後に、私達の代のメンバーのことを紹介させてもらおうと、4年生になるまではあまり出場機会のなかった矢野や山口、吉清らがコンスタントに出場するようになり、また、上原や大島も大事な試合での交替出場での活躍が印象的であった。そして、全体の調整に苦心してくれた光永、データ分析班をまとめてくれた広川など、全員に言及することはできないが、4年間で成長する、ピッチ外でも貢献の場を見つける、そのようなア式の良い面を体現してくれたのではと思っている。また、上級生としては頼りないと言われることもあったが、そんな代を育ててくれた先輩方、ついてきてくれた後輩、また監督、コーチをはじめ支えていただいた方々に感謝を表したいと思う。（長尾林太郎）

公式試合記録

◆アミノバイタル杯関東予選

2回戦 5-0 ○ 東工大 (3/31)
 3回戦 3-1 ○ 成蹊大 (4/7)
 4回戦 0-1 ● 明治学院 (4/14)

第8節 1-1 △ 第17節 1-2 ● 山梨学院
 第9節 2-1 ○ 第18節 0-1 ● 日大

◆京都大学リーグ1部 4勝11敗3分 8位で残留

(前期5/5～7/7、後期8/25～10/27、御殿下他)

第1節 0-1 ● 第10節 0-1 ● 明治学院
 第2節 0-2 ● 第11節 1-2 ● 立正大
 第3節 0-1 ● 第12節 0-2 ● 亜細亜
 第4節 5-1 ○ 第13節 1-1 △ 立教大
 第5節 1-2 ● 第14節 0-2 ● 東経大
 第6節 0-0 △ 第15節 4-0 ○ 帝京大
 第7節 1-0 ○ 第16節 1-2 ● 國學院

◆京都大学定期戦；(7/28、御殿下G)

1軍戦 0-1、2軍戦 4-0、3軍戦 0-0

・部長 鹿園直毅
 ・監督 利重孝夫
 ・コーチ 林健太郎
 ・主将 長尾林太郎
 ・副将 片山 元、賀茂駿介
 ・主務 山口祐吾
 ・練習 御殿下、農学部
 ・部室 農学部



2013年度京都大学リーグ2部成績

	山梨学院	日大	東経大	亜細亜	立正大	明治学院	國學院	東大	立教大	帝京大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
山梨学院大学	—	1○0	4○1	6○0	2○1	3○1	2●3	1△1	3○0	9○1	36	11	4	3	44	18	26
	0●1	3○0	0●3	1△1	2●3	3○0	2○1	1○0	1△1	1△1							
日本大学	0●1	—	2○1	2●3	3○1	1●2	2○1	1●2	2○0	5○0	36	12	6	0	31	18	13
	1○0	3○1	1●2	1○0	3○2	0●1	1○0	1○0	2○1	2○1							
東京経済大学	1●4	1●2	—	3○1	1○0	4○3	1○0	2○1	3○0	0△0	35	11	5	2	34	26	8
	0●3	1●3	3○1	1●5	2△2	2○1	2○0	2○0	5○0	5○0							
亜細亜大学	0●6	3○2	1●3	—	3○1	3○0	0●1	1○0	3△3	4○0	34	10	4	4	33	25	8
	3○0	2○1	1●3	2○1	2△2	1△1	2○0	1△1	1○0	1○0							
立正大学	1●2	1●3	0●1	1●3	—	2○1	3○2	2○0	2○1	5○0	32	10	6	2	35	20	15
	1△1	0●1	5○1	1●2	2○0	1△1	2○1	2○0	4○0	4○0							
明治学院大学	1●3	2○1	3●4	0●3	1●2	—	3○2	1○0	3○1	2○0	32	10	6	2	34	30	4
	3○2	2●3	2△2	2△2	0●2	1○0	1○0	3○1	4○2	4○2							
國學院大学	3○2	1●2	0●1	1○0	2●3	2●3	—	0●1	1●3	2○0	18	5	10	3	20	27	-7
	0●3	1○0	1●2	1△1	1△1	0●1	2○1	0●1	2△2	2△2							
東京大学	1△1	2○1	1●2	0●1	0●2	0●1	1○0	—	5○1	0△0	15	4	11	3	18	22	-4
	1●2	0●1	0●2	0●2	1●2	0●1	1●2	1△1	1△1	4○0							
立教大学	0●3	0●2	0●3	3△3	1●2	1●3	3○1	1●5	—	3○1	12	3	12	3	17	36	-19
	0●1	0●1	0●2	1△1	0●2	1●3	1○0	1△1	1●2	1●2							
帝京大学	1●9	0●5	0△0	0●4	0●5	0●2	0●2	0△0	1●3	—	7	1	13	4	10	54	-44
	1△1	1●2	0●5	0●1	0●4	2●4	2△2	0●4	2○1	2○1							

リーグ出場選手 (Basic Starting Order)

	GK	DF				MF				FW	
前期リーグ	今泉	山口	近松	片山	花嶋	長尾	中西	添田	東野	賀茂	矢野
後期リーグ	今泉	山口	近松	片山	花嶋	長尾	中西	添田	東野	賀茂	羽場

5年ぶり東京都2部へ無念の降格

2013年に東京都1部リーグで他校の関東入替戦の結果で辛くも残留を果たし、推薦枠で生徒を確保して選手層を強化する私立が増える中、2014年は少しでも順位を上げるために、如何に選手の質の差を克服するかを命題にシーズンがスタートした。また1年1年関東昇格へ向け挑戦していたが、長期で挑戦する目線が少なかったため、意思決定に3年生の主要メンバーを常に関わらせ、繋がりのある強化を試みた。スタメンに4年生が2、3名の厳しい懐事情だったが、その分3年生から数多く試合に出る選手を輩出した年である。

シーズン当初は、東大のリーグ内での戦力を受け入れ、ブロックを敷いて守り、カウンターで攻める弱者の戦略でサッカーを構築した。プレシーズンの練習試合ではある程度の感触を持ってスタートしたが、春の総理大臣戦で東工大に苦戦し、上智大に敗退。春のリーグ戦も6試合した時点で1勝1分の勝ち点4、第6節成蹊大戦での0-4敗戦を受け、前からプレッシャーをかけるスタイルに変更する決断を迫られた。失敗の要因として、最前線に都1部でボールを収められるFWが不在だったこと、守備ブロックを敷くための個人戦術・チーム戦術を徹底できなかったこと、を考えている。ひとえに自分の読み違えと、戦術の勉強不足、チームに徹底させられなかった事に起因しており、能力不足で大変申し訳ない気持ちである。その後も勝ち遠く、2勝1分6敗で春季シーズンを終了した。

春季リーグ終了後、利重監督・福田助監督から、体制移行をよりスムーズにし、年初から加速できるように夏で4年生から3年生に体制移行する提案を受けた。現在も夏に体制移行が行われているが、2014年がその制度の始まりとなる。試合に出ていない4年生は夏で全員引退する、という当初の提案だったが、自分が考える東大ア式蹴球部は、サッカーの上手い下手関係なく、互いにリスペクトしより上手く、より強くなることを目指す集団だったため、その部分は反対させて頂き、希望者は夏で引退する現行制度となった。果たしてこの制度が本当にア式蹴球部のためになるかは長期で効果測定が必要な所であり、落とした代が偉そうに恐縮ではあるが、後輩たちがどうなっていくのかは注目する所であるし、是非どんどん強くなって頂きたい。

京大戦は、3軍戦、2軍戦、1軍戦いずれも引き分けとなった。1軍戦は前年0-1で敗戦していたため、何としても勝つとの気持ちで臨んだが、一瞬の隙を

突かれて失点する春季リーグの流れを引き継いでしまった形となった。また、京大戦をもって3年生へ体制移行となった。

体制移行後の秋季リーグも2勝2分5敗に終わり、春季から大勢を変えるには至らず、5年ぶりに東京都2部リーグへ降格する結果となった。ターニングポイントとなったのは第16節の大東文化大学戦で、先制し相手の退場により11人对10人の状況になったにもかかわらず、逆転され敗戦となり、2014年を象徴する試合となった。ここで勝利していれば1部残留の可能性も残っていた。1点差の試合が多く、1つの決定機を入れていれば、1つのピンチを防げていれば、結果は大きく変わったかもしれないが、そこに純然たる実力を感じた1年だった。今振り返っても、もう一度今の自分の知見と実力で挑戦してみたいと思い、あの時の暗澹たる気持ちを繰り返したくない気持ちが交錯する。

総括として、降格の原因は自分の能力不足であり、大変申し訳ない所である。全体を引っ張りながら、自分自身も中心選手としてピッチで活躍していかなければならない中、春は調子を崩し思うようなプレーを出来なかった。また、今考えると戦術面や練習マネジメントなど、当時の自分にもっと能力があれば、またサッカーを学んでいれば何とかなった部分もあったと感じる。

しかしその中でも、早川を中心に学生フィジカル班が整備されたこと、2012年よりスタートした学生GMに選手を引退した末吉が専任で就き専任の流れを作ったこと、自分達の4年の代だけでなく後の代まで考えて行動する精神など、多少なりとも次の代に引き継いで行けたのではないかと1年だったと考えている。

（添田隆司）



公式試合記録

◆アミノバイタル杯関東予選

2回戦 1-0 ○ 東工大 (4/6)

3回戦 2-2 △ 上智大 (PK戦で負け、4/13)

◆京都大学定期戦 (8/3、京大農学部)

1軍戦 1-1、2軍戦 1-1、3軍戦 0-0

◆東京都大学リーグ1部 4勝11敗3分 9位で2部降格

(前期5/4～6/29、後期8/31～10/26、御殿下他)

第1節 0-0 △ 第10節 0-1 ● 東経大

第2節 0-1 ● 第11節 2-0 ○ 立正大

第3節 0-2 ● 第12節 1-3 ● 朝鮮大

第4節 1-0 ○ 第13節 0-0 △ 山梨学院

第5節 0-1 ● 第14節 1-1 △ 亜細亜

第6節 0-4 ● 第15節 1-0 ○ 成蹊大

第7節 2-0 ○ 第16節 1-2 ● 大東文化

第8節 1-2 ● 第17節 0-1 ● 明治学院

第9節 1-2 ● 第18節 0-1 ● 國學院

・部長 鹿園直毅

・監督 利重孝夫

・コーチ 星 貴洋、野口桂佑 (GK コーチ)

・主将 添田隆司

・副将 榊原和洋、花嶋 陽

・主務 奥野大介

・学生GM 末吉弘昂

・練習 御殿下、農学部

・部室 農学部



2013年度東京都大学リーグ2部成績

	朝鮮大	國學院	明治学院	山梨学院	立正大	亜細亜	成蹊	大東文化	東大	東経大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
朝鮮大 学校	—	3△3 0●2	1△1 1○0	1○0 2○1	1△1 3○2	0●1 4○2	0△0 1○0	2○1 1●2	2○0 3○1	1△1 1△1	33	9	3	6	27	19	8
國學院 大学	3△3 2○0	—	0●1 1○0	0●2 2○0	1○0 1○0	2○1 2△2	0●2 0●1	1△1 0●2	2○1 1○0	1○0 1○0	33	10	5	3	20	16	4
明治学院 大学	1△1 0●1	1○0 0●1	—	0●3 0●2	0●3 2○1	1△1 2○1	1○0 1○0	1△1 2○1	2○1 1○0	2○1 3○1	33	10	5	3	20	19	1
山梨学院 大学	0●1 1●2	2○0 0●2	3○0 2○0	—	1○0 1●3	2○1 0△0	0●1 1△1	3○1 2○0	0●1 0△0	2○1 1○0	30	9	6	3	21	14	7
立正大学	1△1 2●3	0●1 0●1	3○0 1●2	0●1 3○1	—	3○1 3●4	1○0 2○0	2○1 4○1	1○0 0●2	3△3 2△2	27	8	7	3	31	24	7
亜細亜 大学	1○0 2●4	1●2 2△2	1△1 1●2	1●2 0△0	1●3 4○3	—	1△1 2○1	0●1 2○1	1○0 1△1	2○1 2○0	26	7	6	5	25	25	0
成蹊大学	0△0 0●1	2○0 1○0	0●1 0●1	1○0 1△1	0●1 0●2	1△1 1●2	—	1●2 0△0	4○0 0●1	1○0 3○1	22	6	8	4	16	14	2
大東文化 大学	1●2 2○1	1△1 2○0	1△1 1●2	1●3 0●2	1●2 1●4	1○0 1●2	2○1 0△0	—	0●2 2○1	4○2 0●3	21	6	9	3	21	29	-8
東京大学	0●2 1●3	1●2 0●1	1●2 0●1	1○0 0△0	0●1 2○0	0●1 1△1	0●4 1○0	2○0 1●2	—	0△0 0●1	15	4	11	3	11	21	-10
東京経済 大学	1△1 1△1	0●1 0●1	1●2 1●3	1●2 0●1	3△3 2△2	1●2 0●2	0●1 1●3	2△4 3○0	0△0 1○0	—	11	2	11	5	18	29	-11

リーグ出場選手 (Basic Starting Order)

	GK	DF					MF				FW	
前期リーグ	金瀬	北山	近松	酒井	花嶋	中西	榊原	添田	坂本	羽場	長久保	
後期リーグ	加藤辰	榊原	近松	平野元	花嶋	中西	添田	酒井	坂本	増田	片瀬	

都1部への一年復帰果たす

しばらく東京都1部リーグになんとか踏みとどまってきたが、昨シーズン遂に2部落ちを経験した。強豪大学との力の差を痛感し、今一度基本からチームを作り直すことを胸に、一年での都1部リーグの復帰を最低限の目標とし、チーム作りに取り組んだ。事実、これまで都1部の強豪大学とぎりぎりの試合を今まで戦ってきた我々にとって、2部の相手は与しやすく、内容では負けても試合には勝つという今まで我々があまり経験しないような結果もありながら、順調に勝ち点を積み重ねることができた。しかし、リーグ2位で終えた春季に対して後半失速し、秋季を終えてリーグ3位という結果になってしまったが、都1部の2チームが関東リーグへの昇格を果たすという幸運もあり、目標であった一年での1部リーグ復帰を果たすことができた。

パス主体のサッカーを

昨シーズンからコーチとして就任して頂いていた星コーチのもと、味方との距離感を大事にして、動的なポジショニングを意識した高度なパスサッカーを目指した。それは、「蹴る」サッカーでは都1部で上にいくことはできないというこれまでの実感と反省があり、今年度だけでなく来年度以降も見据えてのチームの方針であった。実際、メンバーの多くが去年からスターティングメンバーとして試合に出ており、実力的にも達成可能な見通しがあった。守備は例年通りハイプレッシャーからのカウンターを基本とし、攻守の切り替えと運動量という東大の良さは引き続きチームの核として重視した。しかし、やはりパス主体というのは個の技術力がばらばらの我々にとってはなかなか難しいものとなった。練習試合ではできても、公式戦のプレッシャーの中では怖がってしまったり、「蹴る」と「ロングボール」をはき違い、敵のハイプレッシャーの中で、裏にボールを蹴るべきところでも、無理にショートパスに拘ってしまいカウンターを受けるなど、個々の判断力の弱さやそのズレで、なかなか理想とするパスサッカーを実現することはできなかった。それで

も、技術力のあるメンバー中心にパスサッカーにトライする姿勢を見せ、時には美しいパス回しで敵を崩す場面をつくることもできた。パス主体のサッカーを目指すには、個々の技術力と、たとえ失点することがあってもトライし続け、公式戦の中で成功体験を積み上げることが必要であることを認識した。

好成績を残した春季

昨シーズンに1部から降格した我々は、下位チームから順にリーグ戦であたることとなったため、初戦から絶対に落としてはいけない試合が続いた。初戦の首都大学東京戦は、試合を支配するものの中々点が取れず、不穏な空気が続く試合になったが、後半に主将自ら点を取り、1-0でしっかりと勝ち点をあげることができた。その後、3連勝と順調に勝利を重ねていったが、必ずしも内容がよかったわけではなく、続く成城大学との試合で1-1の引き分けとなると、チームの中からも勝ち点は上げているが、目指しているサッカーからは程遠いという声が上がリ、チーム一同気を引き締め直して練習に取り組んだ。その結果、次の帝京大学との戦いでは、圧倒的な戦いで3-0と見事な勝利をおさめ、内実ともに納得の行く勝利を掴むことができた。その後上位3チームとの戦いは、1勝1敗1分と必ずしも良い成績ではなかったが、首位の東京経済大学に勝利して勝ち点1差で2位につけ、春季リーグを終えることができた。

失速した秋季

好成績で折り返した秋季だが、困難な戦いとなった。最初2連勝をあげたものの、それゆえの慢心か、その後一橋大学や帝京大学に大敗を喫し、なかなか勝ち点を挙げることはできなかった。その後、度々気を入れ直して勝利を挙げるものの続かず、結果リーグ3位まで後退しリーグ戦を終えた。しかし、都1部の2チームが関東に昇格したこともあり、昇格枠が増えて、幸運にも1部に昇格することができた。最低限の目標が達成できたものの、かならずしも良い結果を残せたとは言えず、悔いの残るものとなった。それでも、1部に1年で復帰することで昨年の雪辱を晴らすことができ、実力としても人間としても良いメンバーに恵まれた、素晴らしい代であったと思う。

（花嶋 陽）



公式試合記録

◆アミノバイタル杯関東予選

2回戦 2-1 ○ 日大生資4/5

3回戦 0-0 △ 東農大 4/15、PK戦で負け

◆京都大学定期戦（7/18、19、御殿下）初の2日開催

1軍戦 2-1、2軍戦 1-1、3軍戦 0-1

◆東京都大学リーグ2部：9勝5敗4分 3位で1部復帰

（前期5/3～6/28、後期9/6～11/1、御殿下他）

第1節 1-0 ○	第10節 1-0 ○	首都大東京
第2節 2-0 ○	第11節 2-0 ○	日大生資
第3節 1-0 ○	第12節 1-4 ●	一橋大
第4節 1-1 △	第13節 1-1 △	成城大
第5節 4-1 ○	第14節 1-2 ●	帝京大
第6節 4-2 ○	第15節 0-0 △	創価大
第7節 0-0 △	第16節 1-0 ○	玉川大
第8節 1-2 ●	第17節 0-1 ●	武蔵大
第9節 1-0 ○	第18節 2-4 ●	東経大

・部長 鹿園直毅

・監督 利重孝夫

・助監督 福田雅、胡内健一

・コーチ 星 貴洋、野口桂佑（GK コーチ）

・トレーナー 多田久剛、齋藤雄介

・主将 花嶋 陽

・副将 近松岳洋、北山 淳

・主務 松田健太郎

・学生GM 藤岡佑将

・練習 御殿下、農学部

・部室 農学部

2015年度東京都大学リーグ2部成績

	東経大	帝京大	東大	武蔵大	一橋大	日大生資	玉川大	成城大	創価大	首都大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
東京経済大学	—	4○2	0●1	3○2	7○1	1●2	6○1	5○2	3○1	3○1	45	15	3	0	57	20	37
		5○2	4○2	1●3	3○0	1○0	1○0	2○0	3○0	5○0							
帝京大学	2●4	—	1●4	2○1	2○1	0△0	0●1	4○1	2○1	5○0	32	10	6	2	36	25	11
	2●5		2○1	3○2	0●2	4○0	0△0	0●1	4○0	3○1							
東京大学	1○0	4○1	—	1●2	1○0	2○0	0△0	1△1	4○2	1○0	31	9	5	4	24	18	6
	2●4	1●2		0●1	1●4	2○0	1○0	1△1	0△0	1○0							
武蔵大学	2●3	1●2	2○1	—	1●4	2△2	1●4	8○1	7○1	3○1	29	9	7	2	44	36	8
	3○1	2●3	1○0		1●6	1●4	2○0	2△2	4○1	1○0							
一橋大学	1●7	1●2	0●1	4○1	—	1●2	2●4	2○1	1△1	4○1	28	9	8	1	43	34	9
	0●3	2○0	4○1	6○1		0●2	3○1	4●5	4○1	4○0							
日本大学 生物資源科学部	2○1	0△0	0●2	2△2	2○1	—	0●2	2○1	1●2	3△3	28	8	6	4	26	24	2
	0●1	0●4	0●2	4○1	2○0		0△0	3○1	2○0	3○1							
玉川大学	1●6	1○0	0△0	4○1	4○2	2○0	—	0●1	5○0	2△2	23	6	7	5	29	22	7
	0●1	0△0	0●1	0●2	1●3	0△0		0△0	7○0	2●3							
成城大学	2●5	1●4	1△1	1●8	1●2	1●2	1○0	—	0△0	3○2	23	6	7	5	28	37	-9
	0●2	1○0	1△1	2△2	5○4	1●3	0△0		1○0	6○1							
創価大学	1●3	1●2	2●4	1●7	1△1	2○1	0●5	0△0	—	2○0	9	2	13	3	13	50	-37
	0●3	0●4	0△0	1●4	1●4	0●2	0●7	0●1		1●2							
首都大学 東京	1●3	0●5	0●1	1●3	1●4	3△3	2△2	2●3	0●2	—	8	2	14	2	18	52	-34
	0●5	1●3	0●1	0●1	0●4	1●3	3○2	1●6	2○1								

リーグ出場選手（Basic Starting Order）

	GK	DF				MF				FW	
前期リーグ	石川	北山	近松	平野	花嶋	酒井	行天	長久保	中西	柳澤	多田
後期リーグ	石川	松木	近松	平野	花嶋	酒井	山口	増田	中西	坂本	多田

東京都1部で戦い

2014年に東京都2部に降格したが、2015年に1年での1部復帰を果たした。2016年は星コーチが退任し、1部復帰を達成した主力メンバーが大幅に抜ける中で、選手自らが自発的に考え、東大らしさを押し出した自分たちのスタイルを確立し、その上で1部リーグを戦い抜くべく日々の練習に取り組んだ。

東京都サッカートーナメント兼アミノバイタルカップでは関東大会へ進出

リーグ戦の前哨戦ともいべき大会。初戦を大勝で飾ると、昨年1部の学習院大、1部の山学大を敗った上智大に連勝し、ベスト4に進出。都県戦への出場が決まった。準決勝の立正大戦では珍しく乱打戦となるが力及ばず敗れ、続く3決でも東経大に破れ、東京都4位という結果に終わった。2部の相手にはしっかりと勝ち切る力があることを証明した一方で、1部相手には勝ちをおさめることなく大会を終えた。なお、都県戦では前半開始早々に退場者を出したことも響き、産能大に大敗した。

前期リーグ戦では接戦に悉く敗れ最下位

1年で最も重要な大会であるリーグ戦。他の大会で好成績をおさめようと、これで負けたら意味がない。しかし、2016年はまさにそのような年になってしまった。前期リーグにおいては、日大や東経大に力の差をみせつけられ完敗した一方で、残りのほとんどの試合では1点差の接戦となった。しかし、2節の立正大には終了間際の連続失点でまさかの逆転負け。4節の立教大戦で初勝利をおさめるも、続く大東大、亜細亜大、國學院大には全て1点差で敗れた。この3試合は失点の全てがPKであり、ゴール前での弱さがそのまま結果に表れる形となった。

結果9試合でわずか1勝しかあげることが出来ず、目標からは大きく外れた形でリーグ前半戦を終えることとなった。接戦をものにできないのは試合経験が足りないせいなのか、戦術的問題なのか、単に実力不足なのか。いずれにしろ2部降格を免れるためには、こうした接戦をものにしていかなければいけ

ない。

何かを変えなくてはならない。自分たちが変わらなくてはならない。そうした思いのもと、夏の中断期間を迎えることとなった。

京大戦では4-0の快勝

リーグ戦の中断期間に行われる伝統の京大戦。2016年は京大の農学部グラウンドでの開催となった。伝統の一戦ということで当然負けられない戦いであるが、リーグ戦で不振を極める両チームにとってはそれ以上に大きな意味を持つ一戦となった。

高いモチベーションをもった両チームのぶつかりあいで、3、2軍戦と互角の戦い。

最後に行われた1軍戦、東大イレブンはリーグ戦の呪縛から解き放たれたように好パフォーマンスを披露した。白藤や多田らの活躍もあり、東大が4-0の勝利をおさめた。この勝利をリーグ後半戦に何とかしてつなげたい、そうした思いを胸に京都をあとにした。なお、大会MVPには3年の服部が選ばれた。また、前年同様、京大戦後に主将、副将をはじめとする代替わりを行い、チーム体制が移行した。

実力不足、降格

リーグ前半戦の結果を受けて、シンプルかつインテンシティを高めたサッカーに切り替えた東大。夏の中断期間にある程度結果をだし、一定の手応えをつかんでリーグ後半戦に臨んだ。

初戦の日大戦に引き分け、ここから少しずつ勝ち点を重ねていこうというところであったが、続く立正大、山学大には完敗してしまう。前期に引き続き立教大に勝利するも、続く大東大に再び完敗し流れにのることが出来ない。降格の2文字がすぐそこまで迫ってくることとなった。

必勝を期して亜細亜大戦に臨むが、奮闘むなしく引き分けに終わる。この1戦を以て事実上の降格が決定した。結局1年18試合を通して、力の差を見せつけられてしまった。決して手を抜いていたわけではない。練習でも試合でもピッチ内外問わず全員が全力を尽くしていた。しかし、それでもなかなか勝つことはできないのである。

一方で多くの下級生が東京都1部のピッチに立ったが、それぞれ頼もしいパフォーマンスを発揮していたのもまた事実であると思う。

そんな彼らが再び東京都1部の舞台で躍動することを切に願っている。そしてその時は全く別の結果を残してくれると信じている。

（北山 淳）



公式試合記録

◆アミノバイタル杯関東予選

2回戦 8-0 ○ 東京都市大学3/27
 3回戦 4-2 ○ 学習院4/3
 4回戦 1-0 ○ 上智大4/10
 準決勝 3-5 ● 立正大4/17
 3位決定戦 0-1 ● 東経大4/24

◆京都大学定期戦（7/18、京大農学部）

1軍戦 4-0、2軍戦 1-0、3軍戦 1-1

◆東京都大学リーグ1部 2勝14敗2分 10位で2部降格

（前期5/1～7/3、後期8/28～10/9、御殿下他）

第1節 1-4 ● 第10節 1-1 △ 日大
 第2節 1-3 ● 第11節 0-2 ● 立正大
 第3節 1-3 ● 第12節 0-3 ● 山梨学院
 第4節 1-0 ○ 第13節 2-1 ○ 立教大
 第5節 0-1 ● 第14節 0-3 ● 大東文化
 第6節 1-2 ● 第15節 1-1 △ 亜細亜

第7節 0-3 ● 第16節 0-3 ● 東経大
 第8節 0-1 ● 第17節 2-6 ● 國學院
 第9節 1-2 ● 第18節 0-1 ● 帝京大

・部長 鹿園直毅
 ・監督 利重孝夫
 ・助監督 福田雅、胡内健一
 ・ドクター 武富修治
 ・コーチ 野口柱佑（GK コーチ）
 ・トレーナー 多田久剛、齋藤雄介、渡邊大介
 ・主将 北山 淳
 ・副将 加藤辰弥、山田郁也
 ・主務 高野陽介
 ・学生GM 俣野泰佑
 ・練習 御殿下、農学部
 ・部室 農学部

2016年度東京都大学リーグ1部成績

	東経大	立正	日大	立教	山梨学院	大東文化	國學院	帝京	亜細亜	東大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
東京経済大学	—	0●7	1●2	1○0	1○0	2○1	0●3	6○0	3○1	3○0	38	12	4	2	36	23	13
		2●4	3○1	0△0	1○0	1△1	3○1	3○2	3○0	3○0							
立正大学	7○0	—	2△2	1△1	1●4	0●2	2△2	3○0	5○1	3○1	35	10	3	5	40	19	21
	4○2		1○0	0△0	1●2	1△1	2○0	4○1	1○0	2○0							
日本大学	2○1	2△2	—	2△2	1●2	2○1	3○1	2○1	2○0	4○1	33	9	3	6	32	22	10
	1●3	0●1		2○1	1△1	2△2	2○1	1△1	2○0	1△1							
立教大学	0●1	1△1	2△2	—	3○1	2○1	2○0	1○0	2○1	0●1	26	7	6	5	24	19	5
	0△0	0△0	1●2		2●3	1△1	4○1	0●2	2○0	1●2							
山梨学院大学	0●1	4○1	2○1	1●3	—	1○0	0●1	1●4	3○2	3○1	25	8	9	1	28	31	-3
	0●1	2○1	1△1	3○2		0●5	2●3	2●3	0●1	3○0							
大東文化大学	1●2	2○0	1●2	1●2	0●1	—	0●2	0●1	1△1	1○0	24	6	6	6	23	16	7
	1△1	1△1	2△2	1△1	5○0		0△0	2○0	1○0	3○0							
國學院大学	3○0	2△2	1●3	0●2	1○0	2○0	—	1●3	1●6	1○0	24	7	8	3	28	34	-6
	1●3	0●2	1●2	1●4	3○2	0△0		3○2	1△1	6○2							
帝京大学	0●6	0●3	1●2	0●1	4○1	1○0	3○1	—	1△1	2○1	24	7	8	3	25	32	-7
	2●3	1●4	1△1	2○0	3○2	0●2	2●3		1△1	1○0							
亜細亜大学	1●3	1●5	0●2	1●2	2●3	1△1	6○1	1△1	—	2○1	14	3	10	5	19	31	-12
	0●3	0●1	0●2	0●2	1○0	1●3	1△1	1△1		1△1							
東京大学	0●3	1●3	1●4	1○0	1●3	0●1	0●1	1●2	1●2	—	8	2	14	2	12	40	-28
	0●3	0●2	1△1	2○1	0●3	0●3	2●6	0●1	1△1								

リーグ出場選手（Basic Starting Order）

	GK	DF				MF				FW	
前期リーグ	石川	中沖	輕部	工藤	沢登	北山	酒井	山口	長久保	多田	山岐
後期リーグ	石川	中沖	符	工藤	北山	沢登	酒井	長久保	武田	山岐	多田

ア式とア式の外

2017年のア式蹴球部の挑戦は失敗に終わった。東京都2部で6勝4分8敗、勝ち点22で6位という結果を見れば、それは明らかである。2017シーズンのこの記録が関東昇格を目指す今後のア式蹴球部員にとって少しでも参考になればと思う。

関東昇格、そして定着を目指す上で、東大ア式の部員が自分たちの力だけでそのレベルに到達するのは困難であり、多くの人にア式の強化に協力してもらう必要があるという考えのもとに、2017シーズンはそれまでのシーズンと大きく異なる2つの取り組みをした。1つ目はコーチ陣の強化である。元日本代表の岩政大樹氏と林健太郎氏、2014・2015シーズンにア式のヘッドコーチを務めた星貴洋氏の3人が年間を通してア式のトップチームを指導してくださった。東京都2部リーグのチームでは考えられないほどの好待遇である。2つ目は東京ユナイテッドとア式のトップチームの合同練習である。元プロの選手や関東リーグで活躍していた選手たちと一緒に練習を行った。2016年にも東京ユナイテッドの練習に数人参加させてもらうことはあったが、今年はその参加人数と頻度が大幅に増加した。この2つのほかにもプレシーズン期の筋トレをトレーナーさんに直接指導していただくなど主にア式の外部の方にコミットしてもらう形で様々な取り組みをした。

これらの取り組みは東大ア式の部員に新たな視座を与えるという点ではかなりの成果を挙げたと思う。コーチ陣からは毎回の練習でそれまで知らなかった個人戦術や体の使い方、ボールの扱い方などを教えていただき、サッカーというスポーツをより深く知ることができた。特に岩政さんからはサッカーを通してサッカー以外にも通じるような様々な考え方を教えていただいた。東京ユナイテッドの選手からは関東レベルのスピードやフィジカル、技術がどれほどのものなのかを体感させてもらった。それまでは、なかなか関東レベルのチームと練習試合をする機会などなかったが、2017シーズンは毎週のようにそのレベルの選手たちと練習や試合をさせてもらうことができた。

ただこれらの取り組みはリーグ戦での結果には結びつかなかった。1部リーグ昇格を目指していた2017シーズンのア式蹴球部にとって2部リーグ6位というのは本当に不甲斐ない結果だった。うまくいかなかった原因を何か一つに帰結させることは難しいが、リーグ戦を実際にやってみてわかったことは、

チームとしての完成度が他大学よりとても低かったことだ。個人個人はたしかに日々の厳しい練習の中でレベルアップしていたが、チームとして戦術的な面でも精神的な面でも一定レベルの統一を果たせていなかった。主将として自分がやってきたことの中で一番の大きな後悔は、チームの外にばかりに目を向けチーム内部に関することをおろそかにしたことである。関東昇格という目標を掲げるに値するチームにしようという目標にばかりに目を向け、足元を見ることができていなかった。

また、リーグ戦をやってみてもう一つ分かったのは、社会人のやるサッカーと東京都2部のチームのやるサッカーが全くの別物だということである。東京ユナイテッドにいる関東レベルの選手たちは技術も判断力もあり、きちんとボールをつなぐサッカーをする。一方で東京都2部のほとんどのチームは蹴るサッカーしかない。シーズンを通して東京ユナイテッドの選手と練習試合をさせてもらううちに、関東レベルの選手たちのサッカーにどう対応すべきなのかは身についていったが、それはリーグ戦では意味をなさないものであった。「公式戦だと力を発揮できない」と評されることの多いシーズンだったが、その要因はここにあったと思う。

大学の部活動は基本的に4年間で人が全員入れ替わってしまう。ましてや幹部は毎年変わる。そのような環境で組織として継続的に強くなり、関東昇格を果たすのはとても難しいことであり、これまでも多くの先輩たちが様々な形で挑戦してきたが、1977年の東京都リーグ降格以降まだ一度も関東リーグには到達していない。なにかこれまでとは大きく異なる改革をしなければならぬと奮起した2017シーズンの挑戦も上記のように失敗に終わった。

繰り返しになるが、2017シーズンのこの記録が関東昇格を目指す今後のア式蹴球部員にとって少しでも参考になることを願う。（沢登孝介）



公式試合記録

◆アミノバイタル杯関東予選

2回戦 0-2 ● 上智大3/26

◆京都大学定期戦；(7/29, 30、御殿下)

1軍戦 0-1、2軍戦 3-2、3軍戦 1-0

◆東京都大学リーグ2部 6勝8敗4分 6位で2部のまま

(前期4/30～6/25、後期9/3～10/22、御殿下他)

第1節 1-1 △ 第10節 3-0 ○ (不戦勝) 首都大

第2節 1-1 △ 第11節 0-0 △ 亜細亜

第3節 1-3 ● 第12節 1-0 ○ 玉川大

第4節 0-1 ● 第13節 0-1 ● 成城大

第5節 1-2 ● 第14節 3-0 ○ 東工大

第6節 2-1 ○ 第15節 3-1 ○ 日大商学

第7節 1-4 ● 第16節 0-1 ● 上智大

第8節 2-2 △ 第17節 0-1 ● 学習院

第9節 2-1 ○ 第18節 0-1 ● 日大生資

・部長 鹿園直毅

・総監督 利重孝夫

・監督 福田雅

・コーチ 林健太郎、岩政大樹、星貴洋、浅見友峰

・学生コーチ 嶺川一喜他

・主将 沢登孝介

・副将 工藤 航

・主務 服部直弘

・学生GM 俣野泰佑

・練習 御殿下、農学部

・部室 農学部



2017年度東京都大学リーグ2部成績

	上智	学習院	亜細亜	玉川	成城	東大	首都大	東工大	日大生資	日大商学	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
上智大学	—	0●2 2△2	2△2 0●1	1●2 4○2	3○0 0△0	4○1 1○0	3○0 1○0	3○1 5○2	4○1 3○0	4○1 4○1	39	12	3	3	44	18	26
学習院大学	2○0 2△2	—	1●2 0●1	1△1 2○1	2●3 2○1	2△2 1○0	2○1 1○0	6○0 2○1	2○1 2○0	2○0 6○0	39	12	3	3	38	16	22
亜細亜大学	2△2 1○0	2○1 1○0	—	1△1 0●1	0△0 4○2	1△1 0△0	4○1 6○0	3○0 0●1	4○1 2○0	2○1 4○1	38	11	2	5	37	13	24
玉川大学	2○1 2●4	1△1 1●2	1△1 1○0	—	2●3 3○0	3○1 0●1	4○1 2○0	2○0 1●2	4○1 1○0	3○1 3○0	35	11	5	2	36	19	17
成城大学	0●2 0△0	3○2 1●2	0△0 2●4	3○2 0●3	—	1○0 1○0	0△0 0●1	3○1 1△1	2○0 1○0	1△1 0●3	26	7	6	5	19	23	-4
東京大学	1●4 0●1	2△2 0●1	1△1 0△0	1●3 1○0	0●1 0●1	—	1△1 3○0	1●2 3○0	2○1 0●1	2○1 3○1	22	6	8	4	21	21	0
首都大学東京	0●3 0●1	1●2 0●1	1●4 0●6	1●4 0●2	0△0 1○0	1△1 0●3	—	1●2 3○0	0●4 3○1	2○0 4○1	18	5	10	3	18	35	-17
東京工業大学	1●3 2●5	0●6 1●2	0●3 2○0	0●2 1△1	1●3 1△1	2○1 0●3	2△2 0●2	—	2○0 0●1	1●2 2○1	17	5	11	2	18	38	-20
日大生物資源	1●4 0●3	1●2 0●2	1●4 0●2	1●4 0●1	0●2 0●1	1●2 1○0	4○0 1●3	0●2 1○0	—	3○0 3○0	15	5	13	0	18	32	-14
日大商学部	1●4 1●4	0●2 0●6	1●2 1●4	1●3 0●3	1△1 3○0	1●2 1●3	0●2 1●4	2○1 1●2	0●3 0●3	—	7	2	15	1	15	49	-34

リーグ出場選手 (Basic Starting Order)

	GK	DF				MF				FW	
前期リーグ	尾上	中沖	工藤	寺内	松坂	服部	沢登	武田	白藤	山岐	多田
後期リーグ	尾上	中沖	工藤	楨	松坂	田中	沢登	武田	服部	箭川	多田

東大復活、都2部圧倒優勝

昨シーズンはア式にとって信じられない最悪のシーズンとなった。様々な原因を考え、今シーズンは二つの意味での「復活」を掲げた。1つ目は関東を目指すに値する強さの復活、2つ目は東大ア式の主体性、ア式ファーストの復活である。前者はシンプルに「一部昇格」。後者は東京ユナイテッドとの合同練習という名の搾取され続ける関係から脱し、専属のコーチの下、東大ア式だけの練習、試合を行うこと。これは切に願った悲願の達成そして本当に大きな変化であり、ここ数年幹部陣を悩ませていた問題を解消することとなった。つまり今季の体制は学生コーチである山口遼（鹿島アントラーズユース）の下、主将を中沖（暁星）、副将を松坂（藤枝東）として1部リーグ昇格を目指し活動することとなった。先に結果を言えば、リーグ戦では圧倒的な勝負強さをみせ、3試合を残して昇格を決定、次節にて2部優勝を決定した。謙虚さのかけらもないが、恐ろしく圧倒した完璧なシーズンであった。

東京都トーナメント、アミノバイタル杯で格下に惨敗

しかし、リーグ戦前からチームがうまくいっていた訳ではなかった。寧ろその真逆であり、リーグ戦の前哨戦にあたる二つのトーナメントでは両方とも3部のチームに敗れるひどい有り様であった。秋の東京都トーナメントでは東京電気通信大にPKで敗れ、春のアミノバイタル杯では日大商学部を相手に中沖のヘディングで先制するも逆転を許し、1-2で敗れた。正直に言って、1部に昇格できるようなチームでは無い、と昨シーズンの悪夢が頭をよぎった。

そこから戦術云々もちろん重要だが、サッカーの基本である闘う気持ちや球際、セカンドボール、負けることへのアレルギーを繰り返し部員に要求しリーグ戦までチーム力向上に尽力した。

大量得点で首位ターンした前期

トーナメントでの敗戦を受け、例年行っていなかった遠征を行い、試合経験を多く積んでリーグ戦を迎えた。開幕戦では亜細亜大に敗れたものの、その試合内容は遠征で出せていた理想そのものであり、決して雰囲気暗くなることはなかった。それを示すかのように、次節の一橋大戦は槇（武蔵）の値千金のゴールで1-0の勝利を収めると、続く理科大戦ではエース寺山（麻布）の2得点の活躍もあり5-2で逆転勝利、武蔵大戦は中沖の枠外シュートが相手にあたり入るラッキーゴールで1-0、そして玉川大戦では2年大谷（武蔵）の2ゴールで3-1と三連勝。就

職活動真っ只中に行われた帝京大戦は2点ビハインドを追いつく勝負強さをみせた。その後首都大には終了間際に大谷のボレーで追いつき1-1で引き分けたものの、山梨大戦と成城大戦は4年佐保（灘）、井小路（暁星）のハットトリックを含む大量ゴールで共に6得点勝利を収めた。

こうして6勝2分1敗の首位で前期リーグを終えた。それも長年得点力不足が嘆かれていた東大では考えられないほどの大量得点を奪うなど明らかに成長しており、後期に向けて、昇格に向けて自信となる前期であった。

負けない東大、後期も好調維持し優勝

3年前のシーズンのように後期で失速することを大変恐れていたが杞憂であった。後期開幕戦、前期唯一敗れた亜細亜大戦は井小路の2得点で2-1の勝利。ここから理科大戦の不戦勝も含めて、2年中村知（学芸大附属）の合計4ゴールの大活躍により一橋大、武蔵大と3位につけるチームを叩き4連勝となる。この試合に勝利すれば昇格がほぼ確定する状況で迎えた玉川大戦、チームの甘さが出て1-1の引き分けとなり、次節の2位帝京大に敗れると首位陥落となる状況に一変する。

今シーズン最大の試合に全てをかけて挑み、帝京大に4年日野（筑駒）の初ゴールなど3-1で勝利し、3試合を残して今シーズンの目標である1部昇格を果たした。次節の山梨大戦では中村紳（湘南）のハットトリックや中沖の2得点で7-1の大勝を収め、この試合で2部優勝が決まった。終わってみれば開幕戦を落として以降、一度も負けていない素晴らしい成績である。正直、来シーズンから戦いの舞台を1部に移し、関東昇格を目指して活動できる後輩達を心から羨ましく思う。弱小世代と言われ続けてきた自分の代が昇格を果たせたのは、今シーズンの中村知や白藤（武蔵）、1年染谷（柏レイソルU-18）など下級生の活躍、佐保や井小路など4年生の覚醒が無ければありえなかったと思う。改めてチームメイトに恵まれたことに感謝したい。見事に二つの意味での「復活」を果たすことができた今の東大ア式からぶれることなく、チームが、そして個人がいい状態の時も悪い状態の時も、決して誤った決断をすることなく皆で支え合って乗り越えていってくれることを願う。切実に、心から願い、応援しています。

（中沖 隼）

公式試合記録

◆アミノバイタル杯関東予選

2回戦 1-2 ● 日大商学部 3/25

◆京都大学定期戦（7/28、29、御殿下）

1軍戦 3-1、2軍戦 0-1、3軍戦 1-1

◆東京都大学リーグ2部：13勝2敗3分 1位で昇格

（前期4/29～6/24、後期8/26～10/14、御殿下他）

第1節 1-2 ● 第10節 2-1 ○ 亜細亜
 第2節 1-0 ○ 第11節 4-0 ○ 一橋
 第3節 5-2 ○ 第12節 3-0 ○（不戦勝）理科大
 第4節 1-0 ○ 第13節 3-1 ○ 武蔵大
 第5節 3-1 ○ 第14節 1-1 △ 玉川大
 第6節 2-2 △ 第15節 3-1 ○ 帝京大
 第7節 6-1 ○ 第16節 7-1 ○ 山梨大
 第8節 1-1 △ 第17節 3-2 ○ 首都大
 第9節 6-2 ○ 第18節 1-2 ● 成城大

・部長 鹿園直毅

・総監督 利重孝夫

・監督 福田雅

・学生コーチ 山口遼他

・主将 中沖隼

・副将 松坂大和 大谷拓也

・主務 糸谷歩

・学生GM 糸谷歩

・練習 御殿下、農学部

・部室 農学部

2018年度東京都大学リーグ2部成績

	東大	帝京	亜細亜	成城	一橋	玉川	首都大	武蔵	山梨	理科大	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
東京大学	—	1○0	1●2	6○2	1○0	3○1	1△1	1○0	6○1	5○2	42	13	2	3	53	20	33
	3○1	2○1	1●2	4○0	1△1	3○2	3○1	7○1	3○0	3○0							
帝京大学	2△2	—	0△0	2○1	3○1	2○1	0●1	4○1	3○1	1○0	39	12	3	3	37	17	20
	1●3	—	1○0	1○0	1●2	2○1	0△0	3○2	8○1	3○0							
亜細亜大学	2○1	0△0	—	0●1	1●3	2○1	4○2	2△2	3○1	7○1	33	10	5	3	43	21	22
	1●2	0●1	—	1△1	1○0	1●2	3○0	5○1	7○2	3○0							
成城大学	2●6	1●2	1○0	—	0△0	2○1	1△1	0●4	5○2	0●1	31	9	5	4	25	21	4
	2○1	0●1	1△1	—	3○0	1○0	3○0	1○0	1△1	3○0							
一橋大学	0●1	1●3	3○1	0△0	—	1●2	3○0	1△1	0△0	3○0	25	7	7	4	26	18	8
	0●4	2○1	0●1	0●3	—	0●1	0△0	4○1	5○1	3○0							
玉川大学	1●3	1●2	1●2	1●2	2○1	—	2○0	1●2	9○0	3○0	24	7	8	3	33	23	10
	1△1	1●2	2○1	0●1	1○0	—	0△0	3△3	1●3	3○0							
首都大学東京	1△1	1○0	2●4	1△1	0●3	0●2	—	3○1	1○0	1○0	23	6	7	5	18	35	-17
	2●3	0△0	0●3	0●3	0△0	0△0	—	0●2	3○0	3○0							
武蔵大学	0●1	1●4	2△2	4○0	1●3	2○1	1●3	—	1△1	4○0	22	6	8	4	32	34	-2
	1●3	2●3	1●5	0●1	1△1	3△3	2○0	—	3○2	3○0							
山梨大学	1●6	1●3	1●3	2●5	0△0	0●9	0●1	1△1	—	0●3	9	2	13	3	20	66	-46
	1●7	1●8	2●7	1△1	1●5	3○1	0●3	2●3	—	3○0							
東京理科大学	2●5	0●1	1●7	1○0	0●3	0●3	0●1	0●4	3○0	—	6	2	16	0	7	50	-43
	0●3	0●3	0●3	0●3	0●3	0●3	0●3	0●3	0●3	—							

リーグ出場選手（Basic Starting Order）

	GK	DF				MF				FW	
前期リーグ	満永	日野	大谷	楨	内倉	白藤	中沖	佐俣	中村知	中村紳	寺山
後期リーグ	染谷	日野	松坂	楨	吉本	白藤	中沖	寺山	中村知	中村紳	井小路

関東大学女子サッカーリーグ 3部に参戦

創部にこぎつけたものの、東京大学の学部生だけではメンバーが足りず、大学院生の方、慶應義塾大学サッカー部女子の方々、ア式女子所属ではないがサッカー経験者の東大生のお力を借り、大学リーグに出場することができた。期待と不安が入り混じる中で迎えた初戦、一進一退の攻防の中、均衡を破ったのはサッカーを始めて半年に満たない1年田中周だった。サッカー経験者の1年大坪が蹴ったコーナーキックのこぼれ球を押し込み、見事にア式女子初ゴールを奪い、グラウンドは歓喜に包まれた。しかしその後相手に得点を許して逆転負けしてしまい、初勝利はお預けとなった。続く第二戦は、個人の技術でも組織力でも上回る相手に歯が立たず、後半大坪選手が一矢報いるも大量失点で敗戦となった。第三戦はメンバーが揃わず10人で試合に臨むこととなり、数的不利を感じさせないほど善戦するも一歩及ばず。開幕三連敗となった。

待望の初勝利から四連勝

次こそ勝利をと臨んだ第四戦だが、またしても10人で戦うことになってしまう。だがア式女子は前節で10人での戦い方を身につけており、守備の時間が多いものの相手ゴールに迫るシーンも作る。後半、戸枝（大学院生）が放った渾身のミドルシュートがゴールに突き刺さり先制。その後相手のシュートがポストを直撃するなど何度もピンチを迎えるが耐え

に耐え、公式戦初勝利を手にした。ホーム開幕戦となった第五戦では、女子部創設にご尽力くださったGM末吉さん、当時の主将添田さんを始めた男子部の方々、そして慶應サッカー部女子の方々が農学部グラウンドに駆けつけ、声援を送ってくださった。大応援団の目の前で勝利したいア式女子だが、先制点を許す苦しい展開に。しかし大きな声援も後押しとなり、竹内瑞穂選手（慶應）が二得点を挙げ逆転。1年大坪がダメ押しの三点目を沈め、農グラが歓喜の声に包まれた。続く第六戦では成瀬の二得点で打ち合いを制した。第七戦はセンターバックの2年太多和が負傷交代するアクシデントがあったものの、またしても竹内選手の二得点で快勝、四連勝を飾った。

有終の美は飾れず…

勢いに乗って勝利を積み重ねたいア式女子だが、練習試合の機会も多くお互いを良く知る相手、東京外国語大学に対しゴールをこじ開けることができずスコアレスドローに終わった。迎えた最終戦、山梨の地まで電車で揺られ、初の遠方での試合となった。対戦相手の山梨学院大学は、東大と同じくこの年参入したものの、既に実績のある選手や監督が揃っており、磨き上げてきたディフェンスで奮闘するも惨敗。有終の美を飾ることはできなかった。

本当に多くの方々に支えられ、創部1年目のシーズンを完走することができた。結果としては四勝四敗一分の4位で、勝率五分に持ち込むことができ、これからのア式女子の可能性を感じさせる船出となった。（大坪佳夏子）



ア式蹴球部女子部創部メンバーと、入部したばかりの1年生。

公式試合記録

◆関東大学女子サッカーリーグ3部：4勝4敗1分 4位

(9/7～11/2 農学部他)

- 第1節 1-2 ● 学芸大
 第2節 0-6 ● 十文字大
 第3節 0-1 ● 千葉大
 第4節 1-0 ○ 成城大
 第5節 3-1 ○ 茨城大
 第6節 3-2 ○ 埼玉大
 第7節 2-0 ○ 帝京大
 第8節 0-0 △ 東外大
 第9節 0-6 ● 山梨学院大

- ・部長 鹿園直毅
 ・総監督 利重孝夫
 ・監督 福田雅
 ・主将 成瀬明
 ・副将 大多和愛
 ・主務 大多和愛
 ・練習 駒場、農学部
 ・部室 農学部



ア式蹴球部女子創部者のMF成瀬明（4年）。

2014年関東大学女子サッカーリーグ3部成績

チーム	十文字	山梨学院	学芸	千葉	東京	東外大	帝京	埼玉	成城	茨城	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
十文字学園女子大学	—	9○0	4○2	5○2	6○1	3○1	4○0	5○0	8○1	6○0	27	9	0	0	50	7	43
山梨学院大学	0●9	—	0●9	6○1	6○0	11○1	11○0	1○13	10○0	11○0	21	8	1	0	68	21	47
東京学芸大学	2●4	9○0	—	4○3	2○1	0●1	0△0	1○0	1○0	6○0	19	7	1	1	25	9	16
千葉大学	2●5	1●6	3●4	—	1○0	4○0	4○0	5○0	0●9	7○0	15	5	4	0	27	24	3
東京大学※	1●6	0●6	1●2	0●1	—	0△0	2○0	3○2	1○0	3○1	13	4	4	1	11	18	-7
東京外国語大学	1●3	1●11	1○0	0●4	0△0	—	1●5	4○1	1△1	8○0	11	3	4	2	17	25	-8
帝京大学	0●4	0●11	0△0	0●4	0●2	5○1	—	0●3	6○1	6○0	10	3	5	1	17	26	-9
埼玉大学	0●5	1●13	0●1	0●5	2●3	1●4	3○0	—	6○2	7○0	9	3	6	0	20	33	-13
成城大学	1●8	0●10	0●1	9○0	0●1	1△1	1●6	2●6	—	3○0	7	2	6	1	17	33	-16
茨城大学	0●6	0●11	0●6	0●7	1●3	0●8	0●6	0●7	0●3	—	0		9	0	1	57	-56

※他大学の減点行為のため4位に繰り上がりました

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW		交代出場選手	
学芸大	藤井	大多和	竹内	岡本	遠藤	大坪	戸枝	岡野	成瀬	田中	野村		
十文字大	藤井	大多和	竹内	岡本	岡野	大坪	戸枝	成瀬	池田	田中	高木		
千葉大	藤井	大多和	竹内	岡本	岡野	大坪	遠藤	戸枝	成瀬	田中			
成城大	藤井	大多和	竹内	岡本	岡野	大坪	戸枝	岡野	池田	田中			
茨城大	名切	大多和	竹内	岡本	岡野	藤井	大坪	遠藤	成瀬	田中	野村	戸枝	
埼玉大	藤井	大多和	竹内	岡本	岡野	大坪	遠藤	戸枝	成瀬	田中			
帝京大	藤井	大多和	竹内	岡本	岡野	大坪	遠藤	戸枝	成瀬	野村	田中	高木	
東外大	名切	藤井	竹内	岡本	遠藤	大坪	遠藤	戸枝	成瀬	田中			
山梨学院大	名切	藤井	竹内	岡本	岡野	大坪	遠藤	戸枝	成瀬	野村	田中		

2年目のリーグ戦、快調な滑り出し

二度目の出場となった大学リーグ。この年も、東大大学院生の方、慶應サッカー部女子の2年生メンバー5名、そして立ち上がったばかりの文京LBレディーズに所属する大学生メンバーの力を借り、何とか人数を揃えて出場することができた。シーズンの行方を占う重要な開幕戦、相手は昨年接戦を演じた埼玉大学だが、メンバーが揃っておらずこちらが数的有利な状況だった。しかし少人数ながら堅い守備を敷く相手に、中々ゴールを奪えない。そんな中、昨シーズンから前線で力を発揮していた2年大坪が待望の先制点を奪った。前半終了間際には決意の留年をして二度目の出場となった4年成瀬が追加点。流れに乗ったア式女子は、その後大坪と成瀬が二点ずつ追加し、ダブルハットトリックで快勝。順調な滑り出しとなった。第二戦はこの年参戦の日本大学だが、実力者揃いの強敵であった。前半早い時間に戸枝（大学院生）のコーナーキックを大坪がヘディングで流し込み先制するも、その後は防戦一方であった。何度も危ないシーンがあったものの、後にこの年キャプテンを務めた3年大多和が「今季のベストゲーム」と称するほど集中した守備を最後まで続け、虎の子の一点を守り切って勝利をもぎ取った。ホーム開幕戦となった第三戦、前半は一進一退の攻防が繰り返され、拮抗した展開となる。均衡を破ったのは、後半も冷静さを保ち続けた戸枝だった。その後、成瀬の鮮やかなヘディングシュートで追加点。開幕三連勝を飾った。

強豪校の猛攻と、決定力不足に苦しむ

更なる連勝を狙った第四戦であったが、何度もチャンスを作るもゴールにあと一歩届かず、無念の引き分けとなった。これ以降、ア式女子は連続失点や

無得点試合を重ねてしまい、苦しむこととなる。第五戦は遠方でのアウェーゲーム。個人の実力のレベルが段違いである流通経済大学に対し奮闘するも、相手ゴールにはほとんど近づくことすらできず、大量失点で初黒星を喫した。第六戦は裏のスペースへ精度の高いボールを蹴り込んで来る相手に対し対応が後手に回り、悪い流れを断ち切れず連敗してしまう。第六戦、前二試合の反省を生かそうと意気込んで臨んだものの、2部リーグから降格してきた技術・戦術ともに上回る相手に太刀打ちできず、三連敗となった。迎えた第七戦、昨年も接戦を制した相手だけに、絶対に勝ちたい試合だったが、立ち上がりで二失点してしまい、その後も追いつけることができず、農学部グラウンドで初の敗戦となった。悔し涙を流す部員もいた。何とか流れを変えようと、個人目標を立てて臨んだ第八戦だったが、またもゴールを守り切ることができず、シュートも0本に終わった。

背水の陣で臨んだ最終戦

五連敗で迎えた最終戦。全員の勝利への気持ちは一つだった。前半立ち上がり、2年田中のアシストから、谷山葵選手（慶應）が公式戦初ゴール、ア式女子として五試合ぶりのゴールを決め、全員が歓喜に沸いた。後に「試合中なのに嬉し涙が出そうだった」と2年大坪は語っている。その後守り切ることができず追いつかれて引き分けに終わってしまったが、何とか連敗を止めてリーグを締めくくることができた。結果は三勝二分五敗の八位で終わった。昨年より大きく順位を落としてしまったが、これが現時点での実力ということだろう。来年は一つでも多くのゴールを奪い、一つでも多く勝利を挙げられるよう、まずはメンバーの確保から全力で臨みたいと思う。（大坪佳夏子）



最終節学芸大戦の出場メンバー全員での集合写真。横断幕は創部者成瀬の引退に際し贈られたもの。

公式試合記録

◆関東大学女子サッカーリーグ3部： 3勝5敗2分 8位
(8/30～11/1、農学部他)

第1節 6－0 ○ 埼玉大
 第2節 1－0 ○ 日本大
 第3節 2－0 ○ 成城大
 第4節 0－0 △ 帝京大
 第5節 0－6 ● 流通経済大
 第6節 0－3 ● 東京情報大
 第7節 0－10 ● 日女体大
 第8節 0－2 ● 東外大
 第9節 0－5 ● 千葉大
 第10節 1－1 △ 学芸大

・部長 鹿園直毅
 ・総監督 利重孝夫
 ・監督 福田雅
 ・コーチ 西室陽（文京LBL）
 ・主将 大多和愛

・副将 大坪佳夏子
 ・主務 大多和愛
 ・練習 農学部、駒場、小石川、江戸川橋
 ・部室 農学部



最終節、5試合ぶりのゴールの歓喜に沸く東大イレブン。

2015年関東大学女子サッカーリーグ3部成績

チーム	日女体	流経	千葉	日本	帝京	東情	学芸	東京	成城	埼玉	東外	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
日本女子体育大学	—	4○0	1○0	7○0	9○0	0△0	7○0	10○0	9○0	12○0	17○0	28	9	0	1	76	0	76
流通経済大学	0●4	—	3○0	4○2	5○2	5○1	4○1	6○0	1○0	13○1	5○0	27	9	1	0	46	11	35
千葉大学	0●1	0●3	—	3○2	2△2	3○0	5○0	5○0	4○1	6○1	4○0	22	7	2	1	32	10	22
日本大学	0●7	2●4	2●3	—	6○2	2○0	3○0	0●1	6○0	12○1	8○0	18	6	4	0	41	18	23
帝京大学	0●9	2●5	2△2	2●6	—	1○0	1○0	0△0	2○1	8○0	4○2	17	5	3	2	22	25	-3
東京情報大学	0△0	1●5	0●3	0●2	0●1	—	0△0	3○0	0△0	4○0	4○0	12	3	4	3	12	11	1
東京学芸大学	0●7	1●4	0●5	0●3	0●1	0△0	—	1△1	1○0	1○0	1○0	11	3	5	2	5	21	-16
東京大学	0●10	0●6	0●5	1○0	0△0	0●3	1△1	—	2○0	6○0	0●2	11	3	5	2	10	27	-17
成城大学	0●9	0●1	1●4	0●6	1●2	0△0	0●1	0●2	—	0△0	2○0	5	1	8	2	4	25	-21
埼玉大学	0●12	1●13	1●6	1●12	0●8	0●4	0●1	0●6	0△0	—	2○0	4	1	8	1	5	62	-57
東京外国語大学	0●17	0●5	0●4	0●8	2●4	0●4	0●1	2○0	0●2	0●2	—	3	1	9	0	4	47	-43

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW		交代出場選手	
埼玉大	小尾	大多和	久和	荒木	泉野	大坪	成瀬	谷山	戸枝	小茂鳥	井出	田中	横堀
日本大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	大坪	成瀬	谷山	戸枝	小茂鳥	井出	田中	
成城大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	大坪	成瀬	谷山	戸枝	小茂鳥	井出	久和	田中
帝京大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	成瀬	谷山	井出	戸枝	小茂鳥	大坪	久和	田中
流通経済大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	丸山	成瀬	田中	小茂鳥	大坪	久和	横堀	
東京情報大	小尾	大多和	久和	荒木	泉野	大坪	成瀬	谷山	戸枝	小茂鳥	井出	田中	横堀
日女体大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	大坪	成瀬	丸山	田中	小茂鳥	久和	三谷	
東外大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	成瀬	谷山	田中	小茂鳥	大坪	久和	三谷	丸山
千葉大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	成瀬	久和	谷山	小茂鳥	大坪	田中	三谷	
学芸大	小尾	大多和	菊池	荒木	泉野	大坪	成瀬	丸山	谷山	小茂鳥	田中	三谷	井出

3度目の大学リーグ

この年、過去最多となる5人の新入生（うち経験者1名、初心者4名）が入部し、ア式蹴球部女子の部員は12名となった。しかし怪我人が出たことや、初心者者の体力面の不安からこの人数では心許なく、ア式女子が中心となって2015年に立ち上げた「文京LBレディース」の他大学生4名を迎え、計16名で関東大学女子サッカーリーグに出場した。迎えた開幕戦、技術も組織力も圧倒的な相手に苦戦し、田中選手（3年）が獲得したPKを大坪選手（4年）が確実に決めなんとか一矢報いたものの、二桁失点で敗戦となってしまった。その後の試合も、まずは守備から固めて速攻を狙うスタイルを貫き完成度は高まっていったものの、勝利には届かず、開幕六連敗となった。

リーグ戦後半、巻き返しなるか

文京LBレディースメンバーの頼もしい活躍や、4月にサッカーを始めたばかりの1年生が急成長したこともあり、後半には内容も結果も満足のいく試合をすることができた。東京外国語大学戦では、大坪選手のゴールに加え、2年丸山選手が公式戦初ゴール。ホームの農学部グラウンドでシーズン初勝利を挙げることができ、試合後の集合写真はみな笑顔が弾けていた。

一週間空いての八試合目、直接フリーキックを決められ相手に先制を許すも、集中を切らさずに、守備を固めて追加点を許さず、得点のチャンスを狙った。後半、一瞬の隙をついてセンターバックの弦間選手（文京）から大坪選手に鋭い縦パスが入り、ワントラップからミドルシュート！土壇場で追いつき引き分けに持ち込んだ。先制点を奪われながらも負



攻守両面でチームを牽引したMF大坪選手（3年）。

けなかった試合は、ア式女子初であった。勢いに乗りたいア式女子だったが、続く埼玉大学戦では、途中3点のリードを奪いながら逆転負けを喫し、ホームで悔し涙を流した。点差と時間帯を考えた状況判断ができておらず、チームとしての未熟さが露呈した。前節の悔しさをぶつけた最終戦、拮抗した展開ながら二得点を上げ、三年目にして初めてリーグ戦を勝利で締めくくることができた。

節目となるシーズンへ

計2勝7敗1分、11チーム中9位と大きく負け越したシーズンであったが、チームとして大きく成長できた10試合であった。このシーズンをもって、これまで攻守の要であった選手達が引退を迎えた。創部メンバーが全員部を去り、その意味で新生ア式女子となって臨む来シーズン、リーグ戦での戦いはさらに厳しいものになっていくが、一つでも多くの勝利を、一点でも多くの得点を奪うべく全員で戦っていきたい。（大坪佳夏子）



練習時の集合写真。初めて部員が11人をこえた。

公式試合記録

◆関東大学女子サッカーリーグ3部：2勝7敗1分 9位（11チーム）
（8/27～11/20、農学部他）

第1節 1－10 ● 日本大
第2節 0－2 ● 帝京大
第3節 0－5 ● 流通経済大
第4節 0－4 ● 文教大
第5節 0－1 ● 成城大
第6節 0－2 ● 千葉大
第7節 2－0 ○ 東京外国語大
第8節 1－1 △ 東京情報大・中央学院大
第9節 3－4 ● 埼玉大
第10節 2－0 ○ 学芸大

・副将 小尾真里奈
・主務 田中周
・練習 御殿下、農学部、駒場ラグビー場、小石川、江戸川橋
・部室 農学部

・部長 鹿園直毅
・総監督 利重孝夫
・監督 福田雅
・コーチ 長谷川太郎（文京LBL）
・主将 大坪佳夏子

2016年関東大学女子サッカーリーグ3部成績

	流经	日大	文教	千葉	成城	帝京	東外大	埼玉	東京	東京情報・中央学院	学芸	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
流通経済大学	—	4○2	7○1	9○0	7○0	6○0	12○0	13○0	5○0	6○0	3○0	30	10	0	0	72	3	69
日本大学	2●4	—	2○1	5○0	7○0	7○1	6○2	16○0	10○1	5○0	5○0	27	9	1	0	66	9	57
文教大学	1●7	1●2	—	4○2	9○0	4○1	11○1	4○0	4○0	5○0	6○0	24	8	2	0	49	13	36
千葉大学	0●9	0●5	2●4	—	1●2	5○3	2○0	10○1	2○0	5○0	3○0	18	6	4	0	30	24	6
成城大学	0●7	0●7	0●9	2○1	—	2○1	2△2	4△4	1○0	0●3	2○0	14	4	4	2	13	34	-21
帝京大学	0●6	1●7	1●4	3●5	1●2	—	0●1	4○2	2○0	2○1	1○0	12	4	6	0	15	28	-13
東京外国語大学	0●12	2●6	1●11	0●2	2△2	1○0	—	4○1	0●2	1△1	3○1	11	3	5	2	14	38	-24
埼玉大学	0●13	0●16	0●4	1●10	4△4	2●4	1●4	—	4○3	0△0	2○0	8	2	6	2	14	58	-44
東京大学	0●5	1●10	0●4	0●2	0●1	0●2	2○0	3●4	—	1△1	2○0	7	2	7	1	9	29	-20
東京情報大・中央学院大	0●6	0●6	0●5	0●5	3○0	1●2	1△1	0△0	1△1	—	0△0	7	1	5	4	6	26	-20
東京学芸大学	0●3	0●5	0●6	0●3	0●2	0●1	1●3	0●2	0●2	0△0	—	1	0	9	1	1	27	-26

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW		交代出場選手			
日本大	小尾	大多和	久和	弦間	松田	大坪	横堀	水谷	田中	八巻	金子	平田			
帝京大	小尾	大多和	久和	弦間	松田	大坪	戸枝	平田	金子	田中	八巻	丸山	水谷		
流通経済大	小尾	大多和	久和	弦間	松田	大坪	戸枝	八巻	平田	金子	田中	水谷	横堀		
文教大	小尾	大多和	久和	弦間	松田	大坪	戸枝	福田	金子	丸山	田中	八巻	水谷		
成城大	小尾	大多和	久和	弦間	松田	大坪	横堀	水谷	田中	八巻	金子	平田			
千葉大	小尾	大多和	福田	弦間	鈴木	大坪	久和	戸枝	金子	田中	八巻	水谷	松田	丸山	横堀 平田
東京外国語大	小尾	大多和	久和	弦間	鈴木	大坪	戸枝	水谷	金子	八巻	田中	松田	横堀	平田	
東京情報大・中央学院大	小尾	大多和	久和	弦間	松田	大坪	横堀	水谷	田中	八巻	金子	平田			
埼玉大	小尾	大多和	福田	弦間	鈴木	大坪	戸枝	水谷	金子	久和	田中	平田	松田	横堀	
学芸大	小尾	大多和	福田	弦間	鈴木	大坪	戸枝	水谷	久和	丸山	田中	平田	横堀	松田	

4度目の関東大学女子サッカーリーグ

部員数が11人以上揃ったものの開幕前に怪我人が出てしまい、リーグ戦11試合を戦い抜くためにこのシーズンも文京LBレディースの部員3名に出場してもらった。期待の1年生経験者・小倉をアンカーとし、昨シーズンチーム得点王の4年大坪を下げて中盤を固めた4-1-4-1の布陣で臨んだ。

開幕戦の帝京大学戦では流れるようなパスワークから4年大坪のロンググループシュートで得た一点を守りきり勝利。相手の人数が少なかったものの攻め込まれる時間が多い中、貴重な勝ち点3を得た。その後毎年苦しめられている私立大学（推薦校）との戦いが続いた。昨年対戦した時よりも失点を減らそうという意識で臨んだものの、3試合で37失点を喫してしまった。続いて国立大学との3連戦。ここで勝ち点を積み重ねたいところである。しかし、私立大学との防戦一方の試合でとりあえずクリアするという癖がついてしまい、なかなか攻めの姿勢に転じることができず、3戦3敗。台風が日曜日に重なり度々試合が延期となり、迎えた3週間ぶりの埼玉大学戦。前半は両者譲らず0-0。後半、右サイドハーフに入った3年横堀がコーナーキックのこぼれ球を押し込み先制、さらに裏へ出たボールをゴールキーパーの足元から奪って2得点。そのまま2-0と気持ちの良い勝利。横堀は高校まで生徒会、大学から運動を始めた初心者である。それでも努力を重ねればここまで成長できる、ということを証明してくれたという意味でもとても大きなことであった。続く中央学院大学戦、相手の人数が少なく初めてボールを持たされる展開となった。攻撃のアイデアに欠き攻めあぐね、速攻を受け失点、0-1で敗北。観に来て下さった方々に申し訳なく、不甲斐ない気持ちでいっぱいになった。残り2戦、組織的な守備がだいぶ形になったと思いきや全く歯が立たず、連敗で散っ

た。

2勝で3部リーグ10位

最終的に2勝9敗、12チーム中10位という結果に終わり、目標としていた「5位以上」には遠く及ばなかった。得点は東大部員による3得点と文京LBレディースの選手によるフリーキックを含む2得点、11試合で計5点と物足りない結果となってしまった。あまりパツとしないシーズンではあったが、毎週試合のビデオを観てコメントし合い、修正すべき点を練習メニューに組み込むといったサイクルを作れたことや、夏の走り込みにより1年生も90分走れる体力が付いたことなどポジティブな面も見られた。

シーズンを振り返って、守備だけするサッカーではなく、今後はリスクを負ってでも攻める時間を作っていきたいという意見が多かった。経験者や上級生を中盤や守備陣に配置せざるを得ず、なかなか攻撃に迫力を出すのが難しいという現実はある。今はまだ堅守速攻型とも名乗れない実力である。それでも東大生として頭脳をフル回転させ、過去の数々の試行錯誤から学んで成長し、私立校ともしっかりと戦えるような未来に期待したい。（小尾真里奈）



東大ア式蹴球部女子初の公式ユニフォーム。2017シーズンから着用（LB会が贈呈した）。



最終節成城大学戦後の集合写真。

公式試合記録

◆関東大学女子サッカーリーグ3部：2勝9敗 10位(12チーム)
(9/3～11/23、農学部他)

第1節	1-0	○	帝京大
第2節	0-8	●	文教大
第3節	0-12	●	日本大
第4節	0-17	●	日本女子体育大
第5節	0-2	●	東京学芸大
第6節	1-8	●	千葉大
第7節	1-3	●	東京外国語大
第8節	0-6	●	上武大
第9節	0-5	●	成城大
第10節	2-0	○	埼玉大
第11節	0-1	●	中央学院大

- ・部長 鹿園直毅
- ・総監督 利重孝夫
- ・監督 福田雅
- ・コーチ 長谷川太郎（文京LBL）
- ・主将 小尾真里奈
- ・副将 水谷優香
- ・主務 横堀ミラノ
- ・練習 御殿下、農学部、駒場、小石川、江戸川橋
- ・部室 本郷旧総務部屋（仮）

2017年関東大学女子サッカーリーグ3部成績

チーム	日本	上武	日女体	文教	千葉	成城	学芸	東外大	中央院	東京	帝京	埼玉	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
日本大学	—	5○0	4○0	6○1	3○0	10○0	8○0	14○0	17○0	12○0	20○0	23○0	33	11	0	0	122	1	121
上武大学	0●5	—	1○0	2○0	6○0	2△2	3○0	3○0	1○0	6○0	15○1	6○0	28	9	1	1	45	8	37
日本女子体育大学	0●4	0●1	—	5○2	4○0	10○0	4○0	9○0	7○0	17○0	9○0	25○1	27	9	2	0	90	8	82
文教大学	1●6	0●2	2●5	—	6○2	2○0	4○1	2○0	3○0	8○0	12○0	9○0	24	8	3	0	49	16	33
千葉大学	0●3	0●6	0●4	2●6	—	2○0	0●2	2○0	5○0	8○1	4○0	11○0	18	6	5	0	34	22	12
成城大学	0●10	2△2	0●10	0●2	0●2	—	1○0	1△1	3○0	5○0	2○0	3○0	17	5	4	2	17	27	-10
東京学芸大学	0●8	0●3	0●4	1●4	2○0	0●1	—	1○0	2△2	2○0	3○0	2○0	16	5	1	5	13	22	-9
東京外国語大学	0●14	0●3	0●9	0●2	0●2	1△1	0●1	—	2△2	3○1	1○0	2○0	11	3	6	2	9	35	-26
中央学院大学	0●17	0●1	0●7	0●3	0●5	0●3	2△2	2△2	—	1○0	1●3	5○1	8	2	7	2	11	44	-33
東京大学	0●12	0●6	0●17	0●8	1●8	0●5	0●2	1●3	0●1	—	1○0	2○0	6	2	9	0	5	62	-57
帝京大学	0●20	1●15	0●9	0●12	0●4	0●2	0●3	0●1	3○1	0●1	—	1●2	3	1	10	0	5	70	-65
埼玉大学	0●23	0●6	1●25	0●9	0●11	0●3	0●2	0●2	1●5	0●2	2○1	—	3	1	10	0	4	89	-85

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW	交代出場選手
帝京大	松田	小尾	平田	水谷	兵藤	小倉	大坪	田中	サーカー	横堀	浅野
文教大	松田	小尾	平田	水谷	兵藤	小倉	大坪	田中	サーカー	金子	浅野
日本大	松田	小尾	平田	水谷	横堀	金子	大坪	田中	サーカー		浅野
日本女子体育大	松田	小尾	平田	水谷	横堀	丸山	大坪	田中	金子		浅野
東京学芸大	松田	小尾	平田	水谷	横堀	小倉	大坪	田中	サーカー	金子	浅野
千葉大	松田	小尾	平田	水谷	横堀	小倉	大坪	田中	サーカー	金子	浅野 嶋野 八巻
東京外国語大学	松田	小尾	平田	水谷	横堀	小倉	大坪	田中	サーカー	金子	浅野 嶋野 石綿 八巻
埼玉大	松田	小尾	平田	水谷	横堀	小倉	大坪	田中	金子	八巻	浅野 嶋野 石綿
中央学院大	松田	小尾	平田	水谷	横堀	小倉	大坪	田中	サーカー	八巻	浅野 嶋野 石綿 八巻
上武大	松田	小尾	小倉	水谷	横堀	小倉	大坪	田中	サーカー	石綿	浅野 嶋野 八巻
成城大	松田	小尾	平田	水谷	横堀	小倉	大坪	田中	サーカー	金子	浅野 嶋野 八巻

初めて東大生だけで出場した 5度目のリーグ戦

※本稿は、記念誌の締め切りの関係で、2018年のリーグ戦12試合のうち10月14日までの7試合の結果を踏まえた文章となっている。右頁の試合記録も同様。

規定の変更により他大生の参加ができなくなったという外的要因からではあったものの、初めて東大生だけで出場した関東大学女子サッカーリーグ。女子部プレイヤー12名にOGなど4名の東大生を加え、16名の選手で挑んだ。

昨年度まで力を貸してくれていた文京LBレディースの選手たちはほぼ経験者であったが、今年はそれに頼ることができない。昨年度までよりもさらに厳しい状況の中、それでも掲げた目標は過去2年間の成績の上に行く「関カレ3勝」だった。

開幕、苦しい戦い

開幕直前に上級生に怪我人が出てしまったこともあり、やはり初戦から同じ国公立大相手に2桁失点を喫してしまうなど苦しい戦いを強いられた。昨年からキーパーを務める3年松田の活躍もあったが、攻め込まれる時間が続き、それ以上のシュートを許してしまった。

攻撃面も未熟で、勝てそうなレベルの相手に対しゴール付近にまで行くことはあっても、6試合目までシュート0本の試合が続いてしまった。むしろ攻めた直後にカウンターで立て続けに失点してしまう

など、攻守、そしてメンタル面でも課題は山積していた。

感じた成長、巻き返しへ

しかしここまでの試合でだんだんとDFラインや中盤の息が揃うようになり、特に昨年トップであった2年浅野がサイドバックとしての成長著しく、スピードが持ち味の3年水谷をサイドハーフに置くという攻撃的な布陣も機能するようになってきた。私立の強豪相手でもこの布陣で守備が概ねうまく機能し、失点を抑えられる時間帯が増えてきた。

そして7試合目となる帝京戦、2年サーカーが今シーズン初ゴールを決めた。これまで練習してきた形通りのものではなく、相手のDFラインどうしの弱いパスを見逃さずインターセプトしたことで生まれたものだったが、チームにとっては大きな1点となった。さらに得点には結びつかなかったものの2年小倉や1年小澤（初心者）からのスループスから3年水谷がクロスを上げ、それをゴール前で1年吉松が触るなど得点の形が見えるようになり、攻撃面でも成長がみられた。また、2年兵藤が昨年の怪我からおよそ1年ぶりの復帰を果たした。

残すところあと5試合。毎週全員が試合のビデオを観てMTGで話し合うというサイクルも定着し、また攻撃パターンの練習も効果をあげているように思う。

目標に掲げた3勝を果たすべく、全員で攻守両面について考え、話し合い、全力で戦っていききたい。

（水谷優香）



女子部として初めて、公式戦を御殿下グラウンドで開催。

左は帝京大戦で今シーズンチーム初の得点をしたMFサーカー選手（2年）。右のゼッケンは1年ぶりに試合に出た兵藤選手（2年）。



公式試合記録

※本誌の締め切りの関係で7試合までの記録

◆ 関東大学女子サッカーリーグ3部：

0勝6敗1分 13位（13チーム）

（8/26～10/14 農学部他）

第12節

文教大

第13節

中央学院大

第1節 0-12 ● 千葉大
 第2節 0-2 ● 東京学芸大
 第3節 0-18 ● 日本女子体育大
 第4節 0-11 ● 上武大
 第6節 0-0 △ 立教大
 第7節 0-13 ● 東京女子体育大
 第8節 1-5 ● 帝京大
 第9節 成城大
 第10節 東京外国語大
 第11節 国際武道大

・部長 鹿園直毅
 ・総監督 利重孝夫
 ・監督 福田雅
 ・コーチ 稲葉洸太郎（文京LBL）、藤岡佑将
 ・学生コーチ 大坪佳夏子
 ・主将 水谷優香
 ・副将 小倉優香
 ・主務 平田佳織
 ・練習 御殿下、農学部、駒場、小石川、江戸川橋
 ・部室 農学部

2017年関東大学女子サッカーリーグ3部成績（30.10.16時点）

チーム	日女体	東女体	千葉	上武	中央学院	文教	帝京	国際武道	成城	学芸	外大	立教	東京	勝点	勝	負	引	得点	失点	差
日本女子体育大学	—			2○1	5○0		8○1	4○0	13○0	11○0			18○0	21	7	0	0	61	2	59
東京女子体育大学		—	2○1		2○1	2○0	12○0	8○0				9○0	13○0	21	7	0	0	48	2	46
千葉大学		1●2	—				7○1	7○2		7○2	6○0	11○0	12○0	18	6	1	0	51	7	44
上武大学	1●2			—	1△1	4○1	7○0	8○2			14○0		11○0	16	5	1	1	46	6	40
中央学院大学	0●5	1●2		1△1	—	4○0			5○0		10○0	6○0		13	4	2	1	27	8	19
文教大学		0●2		1●4	0●4	—		3○0	4○2	8○0	7○0			12	4	3	0	23	12	11
帝京大学	1●8	0●12	1●7	0●7			—		1○0	2○0		4○0	5○1	12	4	4	0	14	35	-21
国際武道大学	0●4	0●8	2●7	2●8		0●3		—	3○2	3○0	7○0			9	3	5	0	17	32	-15
成城大学	0●13				0●5	2●4	0●1	2●3	—	2○0	2○0	0△0		7	2	5	1	8	26	-18
東京学芸大学	0●11		2●7			0●8	0●2	0●3	0●2	—			2○0	3	1	6	0	4	33	-29
東京外国語大学			0●6	0●14	0●10	0●7		0●7	0●2		—	2○1		3	1	6	0	2	47	-45
立教大学		0●9	0●11		0●6		0●4		0△0		1●2	—	0△0	2	0	5	2	1	32	-31
東京大学	0●18	0●13	0●12	0●11			1●5			0●2		0△0	—	1	0	6	1	1	61	-60

リーグ出場選手

	GK	DF				MF				FW	交代出場選手	
千葉大	松田	小尾	横堀	浅野	山口	小倉	小澤	水谷	サーカー	田中	高橋	大坪
東京学芸大	松田	小尾	横堀	浅野	山口	小倉	小澤	水谷	サーカー	大坪	高橋	吉松
日本女子体育大	松田	小尾	横堀	水谷	山口	小倉	小澤	浅野	サーカー	田中	高橋	吉松、大坪
上武大	松田	小尾	横堀	浅野	田中	小倉	小澤	吉松	サーカー	大坪	高橋	山口
立教大	松田	小尾	横堀	浅野	山口	小倉	小澤	水谷	サーカー	大坪	吉松	田中、高橋
東京女子体育大	松田	小尾	横堀	浅野	山口	小倉	小澤	水谷	サーカー	大坪	高橋	田中、吉松
帝京大	松田	小尾	横堀	浅野	山口	小倉	小澤	水谷	サーカー	兵藤	高橋	田中、吉松

